
報告・記録

特別支援学級ワークショップについての座談会

～インクルーシブ教育の理念に基づいた活動に向けて～

特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち

はじめに

この活動報告書は、特定非営利活動法人 芸術家と子どもたちが、2016 年 2 月に実施した「特別支援学級ワークショップについての座談会 ～インクルーシブ教育の理念に基づいた活動に向けて～」の記録をまとめたものです。

特定非営利活動法人 芸術家と子どもたちでは、2000 年より、アートを通しての「学び」が、子どもたちの「生きる力」を育むことに繋がると考え、首都圏の公立の小・中学校、特別支援学校、幼稚園、保育園、児童養護施設といった教育や福祉の現場において、アーティストと先生が協力しながらワークショップ型授業を行う活動（ASIAS：エイジアス）を行ってきました。エイジアスの活動においては、既に 770 校・園・施設にて、約 34,500 人の子どもたちが、アーティストによるワークショップ型授業を体験しています。特に、2008 年度からは、それまで、学校の通常学級を中心に実施していた活動を特別支援学級にまで広げ、主に発達障害※1 の子どもたちにとって、このアーティスト・ワークショップがどのような影響・効果があるのかを検証してきました。そして、これまで積み重ねてきた経験をもとに、また新たなアーティスト・ワークショップの可能性を探りたいという思いが、今回の座談会の実施に繋がりました。

この活動報告書は、特別支援学級でのアーティスト・ワークショップの実践について、学校教育に関わる方々などに広く知っていただくことを目的に作成したものです。是非ご高覧いただければ幸いです。

2016 年 3 月

特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち
代表 堤 康彦

※1 平成 17 年に施行（平成 24 年度改正）された「発達障害者支援法」では、「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するもの」と定められている。

目次

2	座談会の目的／座談会の概要
3	レクチャー 「インクルーシブ教育と アーティスト・ワークショップの可能性」 村山 拓 [東京学芸大学総合教育科学系特別支援科学講座講師]
9	座談会 1 ＜先生の会＞ ～学校の「交流」に足りないもの～
27	座談会 2 ＜アーティストの会＞ ～アートで繋がる子どもたち～
43	座談会をふりかえって
44	アーティスト・ワークショップに関する これまでの刊行物

座談会の目的

今回の座談会の主な目的は2つあります。1つ目は、これまで実施した「特別支援学級アーティスト・ワークショップ」を横断的に振り返り、取り組み全体について、俯瞰的に再検討、再評価すること。2つ目は、今後に向けた「特別支援学級アーティスト・ワークショップ」の新しい形を、インクルーシブ教育の観点から検討することです。

当団体のアーティスト・ワークショップは、事業の性質上、実践、評価ともに、当該学級の先生や支援員、当団体事務局員、アーティスト内のみで共有されるに留まってしまい、拡がりに欠けるという課題がありました。より広く、多角的な視点で、アーティスト・ワークショップの本質を捉えていきたい。この考えのもと、今回、これまで多くのアーティスト・ワークショップの現場に立会い、参加してきた先生・アーティストの方々とともに活動を振り返る、「座談会」という形を取ることにしました。

また、今年度中に答申予定の「新しい学習指導要領」の作成に向けた、国の諮問機関である中央教育審議会では、「インクルーシブ教育システムの理念を踏まえた、発達障害を含めた障害のある子どもたちに対する特別支援教育の充実」というのが、今後の重要な課題として挙げられています。この流れを受け、当団体においても、インクルーシブ教育の理念を根本に据えた、新たなアーティスト・ワークショップの形を提案できればと考えたことが、「特別支援学級と通常学級の“交流”としてのアーティスト・ワークショップ」という座談会のテーマの一つに繋がります。

今回の座談会を実施することで、当団体の今後の活動をより充実させていきたいという想いととも、アーティスト・ワークショップが、現在の学校教育のさまざまな課題を解決する一つの手段として、その役割を担っていける可能性を提示したいと考えています。

座談会の概要

【タイトル】

特別支援学級ワークショップについての座談会
～インクルーシブ教育の理念に基づいた活動に向けて～

【構成】

先生・アーティストそれぞれの立場からの忌憚ないご意見を伺うため、座談会は＜先生の会＞ ＜アーティストの会＞の2部構成で開催。また、特別支援教育の専門家である村山拓先生に、座談会に先立ち、当団体のアーティスト・ワークショップの現場を多数ご見学いただき、それぞれの座談会にてご意見を伺いました。

【日程】

＜先生の会＞ 2016年2月10日（水）

＜アーティストの会＞ 2016年2月16日（火）

【会場】

にしすがも創造舎

[東京都豊島区西巢鴨 4-9-1（旧朝日中学校）]

【参加者】

各座談会の記録ページ参照

【スケジュール】

- ① ご挨拶／座談会の主旨説明
- ② インクルーシブ教育の概要説明（村山拓先生・10分）
- ③ 話し合いテーマ1：特別支援学級における
アーティスト・ワークショップの意義（60分）
- ★ 休憩（10分）
- ④ 話し合いテーマ2：特別支援学級と通常学級の「交流」
としてのアーティスト・ワークショップの可能性（70分）
- ⑤ 座談会を経ての考察（村山拓先生・10分）
- ⑥ 参加者の感想およびまとめ

レクチャー

インクルーシブ教育と アーティスト・ワークショップの可能性

【講師】 村山 拓 [東京学芸大学総合教育科学系特別支援科学講座講師]

神奈川県生まれ。東京大学大学院教育学研究科博士課程満期退学ののち、帝京平成大学、東京都市大学の専任講師を経て、2014年4月より東京学芸大学講師（専任）。主な研究テーマは、特別支援やインクルーシブ教育に関するカリキュラム論や授業研究。アメリカのカリキュラム開発の展開やリテラシー概念に関心を持っている。著書に『学校という対話空間』（北大路書房、共著）、『教育学入門』（ミネルヴァ書房、共著）、訳書に『驚くべき学びの世界：レッジョ・エミリアの幼児教育』（ACCESS,共訳）、論文に、“Literacy and Curriculum in the United States” International Journal of Educational Science and Research, Vol.6, No.1 などがある。ドイツのプロオケに誘われるほどヴァイオリンを熱心に弾いていた時期がある。

※ このレクチャーは、座談会（＜先生の会＞、＜アーティストの会＞）の冒頭に、村山拓先生より参加者に向けて、お話しいただいた内容をまとめたものです。

// インクルーシブ教育の概要

インクルーシブ教育の概要

- ・「障害のある子どももない子どもとともに学ぶ」という理念。
- ・英国の 1978 年ウォーノック・レポートによる「特別な教育的ニーズ」、「インテグレーション」の概念が有名。他に「イタリアの実験」など。
- ・日本では、「特別支援教育」導入以降。
- ・いわゆる通常級での支援体制、コーディネーター、個別的教育計画など。
- ・「交流及び共同学習」による取り組みなど。
- ・国連「障害者の権利条約」
(2006 制定、英 2009 批准、日 2014 批准)

インクルーシブ教育という言葉は、すでに学校などでだいぶ知られてきていますが、簡単にその内容、目指している方向性などを確認したいと思います。

「包括的」といった訳語で紹介されていることからわかるように、「障害のある子どももない子どもとともに学ぶ」という理念に基づいた考え方です。何も障害に限ったことではなく、さまざまな教育的ニーズを文字通り「包括」する教育を指すのですが、本日の座談会の趣旨に合わせて、とりあえずそのように定義しておきます。特に有名なのは 1978 年イギリスでの「ウォーノック報告」と呼ばれるものです。この中で「特別な教育的ニーズ」という概念が使われ、障害を含めた多様なニーズを持つ子どもがともに学ぶ、インテグレーション (integration) が提唱されました。同じ 1970 年代には、今でいう特別支援学校を全廃する政策がイタリアで取られる（「イタリアの実験」などと呼ばれます）など、障害のある子どももない子どもとともに学ぶ考え方はこの頃から構想されていました。

// 日本国内の動向

日本の場合は特に「特別支援教育」が制度として導入されて以降の動きが重要かと考えています。いわゆる通常学級での支援体制、指導方法の探究が進められました。またすべての学校での特別支援教育コーディネーターが指名され、校内支援体制の充実に向

けた取り組みが進んでいます。また、平成 21 年改訂の学習指導要領で「交流及び共同学習」の推進が提唱されたように、障害のある子どもとそうでない子どもの、学習場面での積極的な交流や、ともに学ぶための取り組みも進められています。「個別の指導計画」が作成されるようになり、支援の必要な子どもが同じ教室で学ぶための指導方法や課題の整理が進められています。

制度面では、国連で「障害者の権利に関する条約」（通称）が 2006 年に制定され、日本も 2014 年に批准しました。条約の批准とあわせて、「障害者差別解消法」など、国内法の整備も進められています。

インクルーシブ教育（補）

- ・提唱された当初は、文字通りのインクルージョン (full inclusion) が前提として議論されたが、現在は、そこまで徹底したものを標榜しないケースが多い（ように感じる）。
- ・日本の場合は、「インクルーシブ教育システム構築事業」に象徴されるように、枠組みの形成に重点が置かれている。
※実践的課題に迫りにくい。

(参考)「インクルーシブ教育システム構築事業」は、以下の3つからなる。

- ・早期からの教育相談・支援体制構築事業
- ・インクルーシブ教育システム構築モデル事業
- ・特別支援学校機能強化モデル事業

日本の教育政策では、文部科学省による「インクルーシブ教育システム構築事業」に注目する必要があります。インクルーシブ教育の枠組みづくりに重点が置かれており、実践的課題に十分に迫れていないという印象を個人的には持っていますが、実践の蓄積はこれから、という考え方もあるといえます。「構築事業」は、スライドにお示しした 3 つから成っていますが、特に今回の座談会やその先にワークショップに関係するのは「インクルーシブ教育システム構築モデル事業」だと思います。モデルスクールの指定、「交流及び共同学習」のモデル事業の指定、地域におけるスクールクラスター（域内の教育資源の組み合わせ）の指定などを通して、インクルーシブ教育の具体化を目指しています。

// 学びの場の議論：どこで学ぶか

教育的ニーズを持つ子どもが学ぶ「場」は、古くて新しい課題といえます。図1は文部科学省が作成しているものです。ほとんどの時間を通常学級で過ごす場合もあれば、通学が困難なため、自宅や病院での訪問指導を活用する場合もあるということです。インクルーシブ教育の理念に基づけば、可能になり次第、通常学級で学習することになります。必要に応じて通級指導教室や特別支援学校、特別支援学級で学ぶ体制も用意されているということになります（図1右側を参照）。

ここにある学びの場は、以前から用意されているもので、「既に用意されているものを並べ直したに過ぎない」という批判もあります。目新しさは少ないかも知れませんが、用意されている学びの場は多様であるべきで、かつ連続的（断絶していない）という点はこの機会に確認してよいと考えています。

国立特別支援教育総合研究所の棟方先生の調査研究を紹介します。障害のある子どもがどこで学んでいるかを比較検討したものです。図2に示されている通りですが、日本（左端）は、参考のために、通常学級で学ぶ、軽度発達障害のある子ども（6.5%）が棒グラフに上乗せされていることにも注目して下さい。

7 か国の比較検討から、日本の特徴を手短に紹介

したいと思います。

この図から、日本の場合、「障害のある」とされる子どもの割合が低く、しかもその子どもたちが相当な割合で特別な学校や学級で学んでいることがわかります。どこかの国で障害を持つ子どもの出生率が極端に高かったり低かったりするとは考えにくいので、特別な学級に措置するか、そもそも「障害がある」と認定するかには国ごとに考え方や方針の差があることもわかります。その上で日本の場合、障害のある子どもが必要な支援を受けられていない可能性が示唆されます。またインクルーシブな教育環境で学んでいる子どもの割合はまだ高くないこともわかります。更なる取り組みが期待されることです。

// 学び方の多様性

インクルーシブ教育の実現、具体化のために考えなければならないことはたくさんあるのですが、論点として3つ挙げたいと思います。

第一に、学び方の多様性にどう応えるかという問題です。個々の学習上のニーズに応える時に、「学び方が違って来る」という面にもっと注目してよいと思います。どうしても、支援が必要な子どもは、周りの子と比べて「できない」ことが多くなりがちなので、学習内容を減らしたり、易しくしたりすることが多

日本の義務教育段階の 多様な学びの場の連続性

同じ場で共に学ぶことを追求するとともに、個別の教育的ニーズのある児童生徒に対して、その時点で教育的ニーズに最も的確に応える指導を提供できる、多様で柔軟な仕組みを整備することが重要である。小・中学校における通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校といった、連続性のある「多様な学びの場」を用意しておくことが必要。

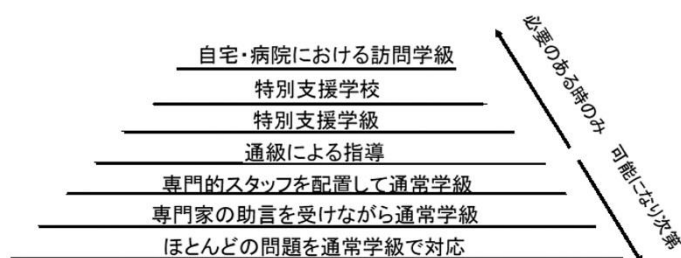


図1 文部科学省(2016)「日本の義務教育段階の多様な学びの場の連続性」

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/gijji/_icsFiles/afieldfile/2012/06/26/1321577_2.pdf

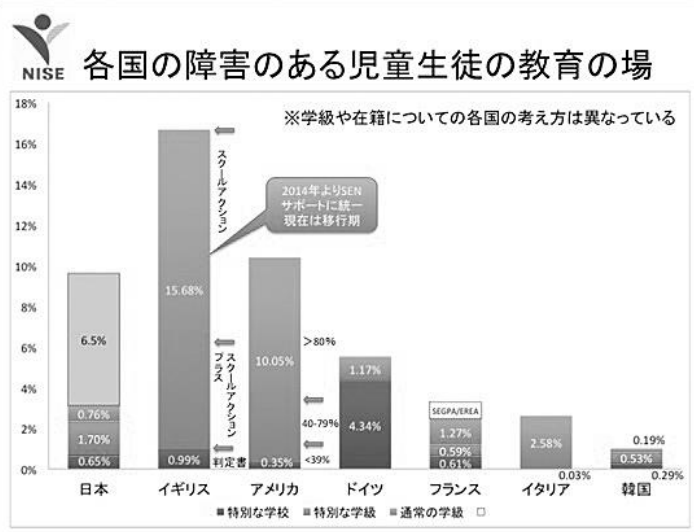


図2 棟方 哲弥(2015)「諸外国における障害のある子どもの教育の現状」

<http://www.nise.go.jp/cms/6,10767,13,257.html>

くなります。もちろん、(その学習の)ゴールを個別に用意することが必要な場合もありますが、ここで提案したいのは、同じ内容を異なる方法で学ぶ可能性を探ることです。例えばある子どもは、こういうツールを使って学ぶけれども、そのツールが必要ない子どもは使わない。支援が必要な子どものために先生が用意した道具が、他の子にとっても有用なものであれば使っても良い(もちろん使わなくても良い)といった形の学習支援が、インクルーシブ教育を進める上では有効ではないかといえます。

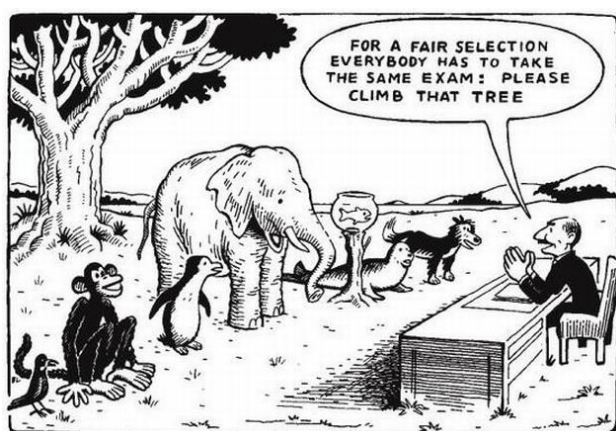


図3 McGill University ホームページより
<http://www.mcgill.ca/osd/facultyinfo/universal-design-faculty-research>

評価の問題も難しいですが避けて通れません。図3の風刺画は、カナダの研究者の論文から引用したものです。右の男性は「公平な選抜のためには、みんなが同じ試験を受けなければなりません。あの木に登ってください」と告げています。もちろんこれはパロディで、サル、ペンギン、象、金魚・・・といったそれぞれの動物が同じ木に登らなければならないのはナンセンスです。その木に登るという学習課題がそれぞれの動物にとって持つ意味(学ぶ値打ち)も違います。学校教育の枠組みの中で、それぞれの子どもの特性に合わせた学びを保障するために、具体的な学習の形態や内容、支援の手立て、学習環境を整理する必要があります。

// 交流及び共同学習の可能性

交流及び共同学習についても、様々な実践が行われていますが、ここでは今回の座談会のテーマである、アートのワークショップの展開の可能性との関係で考えたいと思います。少し前の報告書ですが、特別支援教育総合研究所(前述)のプロジェクト研究成果報告書『「交流及び共同学習」の推進に関する実際研究』(平成20年3月)

(http://www.nise.go.jp/cms/resources/content/403/c-70_all.pdf で閲覧可能)によると、交流及び共同学習は、生活科(小学校)、音楽、体育、特別活動で特に積極的に進められています(他での割合が多くないという課題はありますが、別の機会に論じたいと思います)。また、国語や算数・数学は交流及び共同学習の時間数が短いのに対して、図工・美術、音楽、体育などでは、3回以上、交流及び共同学習を実施している学校が多いことが示されています。つまり、国語や算数・数学では、交流及び共同学習が1回限りのトピックで実施されている可能性が推測されますが、図工・美術、音楽、体育などでは、複数回かけて交流及び共同学習が実施できる可能性が広がっているといえます。交流及び共同学習でアートのワークショップを構想する時に、複数回の授業を使って作品(モノや完成品とは限りません)をつくり上げる、あるいは前回との変化を楽しむということができます。その点で、交流及び共同学習の推進力としてのアートのワークショップに期待するところでもあります。

// 特別支援教育におけるアートの可能性

特別支援教育の場面で、芸術教科、いわゆる技能教科は、子どもの可能性を広げてくれるものとして、以前からその意義や可能性は経験的に知られてきています。例えば特別支援学校では、音楽や図工・美術、体育を行事と関連づけて進める場合があります。文化祭に向けて学年、学部で協同で作品をつくり、練習、発表する中で、子どもの認知や人間関係、身体感覚など、伸ばせる要素がたくさんある

ことも、知られています。

特別支援教育とアート

- ・ 従来から、その意義や可能性は、経験的に知られてきている。
例)・特別支援学校での音楽、美術・図工、体育を核とした学習活動行事とも関連づけて単元計画を設定する場合なども。
- ・ 知的障害特別支援学校でも、音楽と体育は、教科別の指導として実施する場合は、小学部低学年の段階から珍しくない。
- ・ 交流及び共同学習でも、技能教科を活用する場面は少ない。

前項で紹介したように、交流及び共同学習でも、いわゆる技能教科、芸術に関わる教科を活用する例は少なくありません。障害の有無に関わらず、協同で取り組むことができる学習課題を設定しやすいこと、身体技能や認知スキルの差があっても、学習活動を共有することができることなどがその理由ではないかと思います。

// 障害・福祉とアート

障害とアート

- ・ 芸術と福祉についても同様の議論がある。
例)作業所やアート・セラピーの意欲的な取り組み。
アウトサイダー・アート
- ・ 芸術の「効果」も(時々)注目される。
例)2014年に『精神科』誌で「芸術と精神医学」の特集が組まれた。



福祉領域でもアート活動を取り入れた実践が進められています。アート・セラピーの取り組みや、わざわざ「セラピー」と呼ばなくても、アートの活動を取り入れたレクリエーションや日常生活支援など、さまざまです。また、アウトサイダー・アートのように、伝統的な芸術の教育を受けていない人のアート作品も注目されていますが、アウトサイダー・アートの担い手の中には、障害のある方も多く含まれています(ただし、障害者のアートをアウト

サイダー・アートと呼ぶこと自体には議論があります)。

また医療面での効果や実践の報告もあります。例えば2014年1月の『精神科』誌では特集の一つとして「芸術と精神医学」が組まれています。

// 改めて、アートの可能性

交流・共同でアートはどのような魅力を発揮するか

- ・ 学び方が多様であり得るのがアートの魅力(他の教科でももちろんそうだが、アートの場合、例えば作品の多様性、多声性)
- ・ 共同制作(創作、演奏等も含めて)が可能。
個別作業を組み合わせる場合
お互いに触発し合う場合(見合う、見せ合う)
個人の技術の効果が直接は
現れない場合(補う、手伝う……)
- ・ 半日常的な活動内容の意味
- ・ 特殊な記号として?



改めて交流及び共同学習でのアート活動の可能性について考えてみたいと思います。共同制作が可能であるということが第一ではないかと思います。個人の作業を組み合わせで何か一つの作品をつくり上げる場合(例えば首のパーツは〇〇さん、顔の口は* *さん、といった具合に)、作業そのものを協同で行う場合(複数人で一緒に動かなければ作業ができない、大きな道具を用いるなど)、いずれの場合も共同で進められるのは大きな効果といえます。

私自身は今年度(2015年度)、勤務する東京学芸大学の地域連携推進事業の一環で、東京都内の特別支援学校とのアート・ワークショップと展覧会を行いました(<http://sne-gakugei.jp/teaching/user/muraya/201512031912.html>)。これは学芸大の洋画研究室が数年実施してきたもので、美術の学生さんが学校の先生方と相談しながら企画してくれるもので、洋画研究室から声をかけてもらって、参加したものです。いずれは小学校や中学校とも連携できればよいと考えています。

//学校内外の専門家の連携

学校にアーティストが来てくれるという「芸術家と子どもたち」の活動はそれだけで貴重なものだと思いますが、昨今学校でよくいわれる「連携」の面から短く考察したいと思います。今回の座談会に先立ち、複数のワークショップを参観させていただきましたが、アーティストと担任の先生方の意思疎通の重要性を実感しています。実際にどのような打ち合わせをされているのかはわかりませんが、教室の場面で(良い意味で)お互いに意図を読み合っているように感じました。

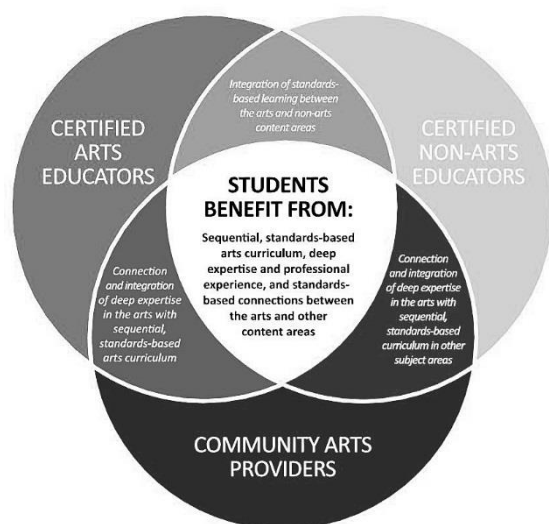


図4 National Art Education Association “Arts Education for All Students”
<http://www.arteducators.org/advocacy/arts-education-for-americas-students>

上の図は National Art Education Association による “Arts Education for All Students” (すべての子どものためのアート教育) の概念図です。三つの円がすべて重なり合っているところに「子どもが受ける恩恵は〜〜からくる」と記されています。左上の円は、「アートの専門の教師」、右上の円は「アート以外(の領域)が専門の教師」、中央下の円は “Community Arts Providers” とあり、直訳すると「地域社会でアートを提供してくれる人」ということになるのですが、日本の学校の文脈でいえば、「学校外にいるアートの専門家」といえると思います。これらの専門家がチームでアートの学習活動を進める時に、それぞれがどのよ

うな役割を果たすのか、どのような面で連携するのかをモデル化しています。例えば、アート以外を専門とする先生と、アーティストの円の重なるところには、アート活動とアート以外の学校の標準カリキュラムとの接続と統合といった内容が記されています。学校で通常行われている学習活動と、アーティストがもたらしてくれる活動との接点を見出しながら、子どもたちにとって意味のある学習経験をともにつくっていくということになるでしょう。NAEA のモデルはその手掛かりを示してくれると思いますし、わざわざ「すべての子ども」と銘打っている点にも魅力を感じています。

連携の可能性(学校内外問わず)

- ・ 日常的な学習場面で、アートの活動が入ることによる、子どもの変化
- ・ 特別支援学級や通級指導教室での学習内容の多様性。
 例えば、担任の先生がどのような役割を担うかは検討が必要。

このように、学校場面でのアートの意義や可能性は小さくないように感じます。また、本座談会を機にこれから進めて行こうとされている交流及び共同学習についても、アート活動が媒介となってくれる面が大きいとも思います。インクルーシブ教育の起爆剤としてのアーティスト・ワークショップにも引き続き期待したいと思います。

座談会 1

先生の会

～学校の「交流授業」に足りないもの～

【実施日】 2016 年 2 月 10 日（水）

【参加者】 N 先生 [東京都内公立小学校 4 年生担任]

S 先生 [東京都内公立小学校 特別支援学級担任]

K 先生 [東京都内公立小学校 特別支援学級担任]

村山 拓 [東京学芸大学総合教育科学系特別支援科学講座講師]

堤 康彦 [特定非営利活動法人芸術家と子どもたち代表]

中西 麻友 [特定非営利活動法人芸術家と子どもたち 事務局スタッフ]

【進行】 久保田 菜々子 [特定非営利活動法人芸術家と子どもたち 事務局スタッフ]

【記録】 竹丸 草子 [特定非営利活動法人芸術家と子どもたち 事務局スタッフ]

//ご挨拶

堤：今日は学期末のお忙しい中、お集まりいただきありがとうございます。私共の団体では、こういった座談会はやったことがなく、あまり慣れていないのですが、5、6年前から特別支援学級でアーティスト・ワークショップをやらせてもらっている中で、今後の活動を考えていく上でも、一度こうした議論の場を設けられたらと思っておりました。特に今回は、「インクルーシブ教育」というテーマでお話できればと考えております。

これまでお世話になってきた、先生方にお話を伺いたいとなった時、すぐに頭に浮かんできた先生方にお声がけさせていただきました。お忙しいところ、本当にありがとうございます。普段、学校での打合せ等でお話を伺ってはいますが、また今日改めて、伺えるのを楽しみにしております。

村山先生には、昨年の夏に突然声をかけさせていただいたのを、本当に快く受けていただきました。受けていただいただけでなく、現場の学校にもワークショップを見に来ていただいたり、本当にありがとうございます。今日また、勉強させていただきたいと思います。

この座談会は、今日の〈先生の会〉に引き続き、来週は〈アーティストの会〉も実施します。皆さんから勉強させていただいたことを、次年度以降にも繋げていきたいと思いますので、どうぞ御指導のほど、よろしくお願いいたします。

テーマ 1

特別支援学級における アーティスト・ワークショップの 意義について

事務局スタッフ（以下、事務局）：それでは、早速テーマ 1 について話していきましょう。これまで、先生方には何度も、当団体のアーティスト・ワークショップにご応募いただき、実際にご参加いただいているかと思います。そこで、これまでのご経験を振り返り、

- ◆ そもそもなぜアーティスト・ワークショップに応募したのか
- ◆ 実際にアーティスト・ワークショップを経験して、どのようなことを感じたか
- ◆ アーティスト・ワークショップを特別支援学級で実施することの良さ

などについて、お考えのことを自由にお話いただけたらと思います。それでは、N先生からお願いいたします。



特別支援学級と通常学級の課題の違い

～N先生とアーティスト・ワークショップ～



N先生 [都内公立小学校 4年生担任]

特別支援学級にて2回、通常学級にて2回、
演劇と身体表現（新井英夫など）のワーク
ショップに参加。

//初めてのプロのアーティストとの学芸会

N先生：一番最初に私が関わらせていただいたのは、知的障害・固定級の特別支援学級での、学芸会に向けての取り組みでした。当初、絵本から自分で台本をつくって上演しようと考えていたのですが、たまたま「芸術家と子どもたち」のパンフレットを目にし、「プロのアーティストが作品づくりを手伝ってくれる、なんて良いプログラムなんだ！」という軽い気持ちと、個人的にも舞台芸術が好きなので、「プロの人と作品をつくり上げていって、どうしたことなのだろう」という興味とで申し込みました。

当時はあまりきちんと考えられていなかったのですが、来ていただいた演劇のアーティストの方と、もっといろいろな関わり方ができたのでは、と後々になって思うのですが、最初の取り組みを通して、学級に在籍する子どもたちが「ボディイメージが持っていない」という課題があることに気付きました。

//特別支援学級での「非言語的コミュニケーション」

N先生：「身体を使った活動をもっと深めたい」と2回目に応募した時は、ダンサーの方が来てくださいました。プロのダンサーのワークショップを見ていて「面白い！」と感じたのは、特別支援学級の子どもたちだからこそ「非言語的コミュニケーション」です。例えば、身体を使ったコンタクトだったり、間合いの取り方だったり、子どもたちなりの発見があったのではと思っています。

アーティストの方と一緒に授業をやる中で、教員

的ではないアプローチというものを目にしたのも大きな収穫です。今でもワークショップ中に見たボディワークなどを、自分で体育の時間にやったりもしています。

//通常学級での「表現の耕し」

N先生：その後、通常学級の担任になりまして。通常学級の子どもたちは特別支援学級の子とは違った課題を抱えているように感じました。特別支援学級の子どもたちは、感じたことや自分の感情をそのままに表現するのですが、通常学級の子はあまり表に出さない、表現しない。

そこで今度は、「見たこともないような表現をするアーティストが良いです」とリクエストしたところ、また新しいダンサーの方を連れてきてくださいました。2日間だけの取り組みだったのですが、作品づくりをして、休み時間に他の学年の児童を対象に発表を行いました。このワークショップを通して、子どもたちの「表現の耕し」ができたので、翌年は学芸会に向けての取り組みということで、新井英夫さんと一緒に作品づくりを行いました。

//板切れの音が音楽になる瞬間

N先生：新井さんとのワークショップの中で、特に印象深かったのが、ペアになって板切れを叩く活動。ただの板切れなんですけど、叩いてるうちに、それが音楽になる瞬間を感じられる。子どもたちも出会ったことない体験だったんじゃないかな。普段の音楽

子どもたちの予想外の姿に感動
～K先生とアーティスト・ワークショップ～



K先生 [都内公立小学校 特別支援学級担任]
特別支援学級にて2回、身体表現（セレノグラフィカ、楠原竜也）のワークショップに参加。

の授業などで、楽器演奏に苦手意識を持っていた子ども音を響き合わせ、楽しめていた内容でした。

// 子どもたちから見た、新井英夫さんとの活動

N先生：実は今回、当時担任をしていた学級の子どもたちに、「あの時の活動はあなたたちにとって何だったのだろう」という投げかけをしたんですよ。その返事をいくつか紹介しますね。

「学芸会は先生に指導されて、台本を覚えてやっていくものだと思っていたので、学芸会の劇を練習をしているという印象はなかった」「ずっと遊んでる感じだった」。この子に「でも、作品できたでしょ？」と返したら、「そうだね」と返事がありました。「何か発見はあった？」と聞くと、「やってて楽しかったから良かった」とか、「何もかも自分たちで考える、今までしたことがない経験ができた」とか、返事をもらいました。

長くなりましたが、特別支援学級と通常学級、それぞれ経験させていただいて、異なる課題の中での活動になるところも「面白いな」という感想を持っています。以上です。

事務局：N先生ありがとうございました。続いて、K先生お願いいたします。

// 初めてのワークショップは身体表現

K先生：今の学校に赴任してきた時、「毎年申し込んでるんだけど通らないんだよね」と同僚から教えてもらったのが、「芸術家と子どもたち」のワークショップを知ったきっかけでした。初めて当選した時には、「どうしよう！」と、とても驚きまして。うちの学級は、担任含め、アーティストの方とは初めての出会いだったので、どうやって進行していくんだろうとドキドキしていました。どんなジャンルのアーティストに来てもらおうかと悩みましたが、一番教員が教えにくい身体表現を選びました。

// 子どもと一緒に楽しんでもくれるアーティスト

K先生：実際にワークショップを経験して良かったなと思ったことは、子どもたちが動きを楽しんでいる姿や、遠巻きに見ているかと思っていた高学年の児童が、低学年の児童の楽しそうな姿につられて、一緒に楽しんでいた姿を見られたことですね。教員は指導する立場ですが、アーティストの方は一緒に動いて楽しんでもくださる。学校や教員にはできないことをしてくださっているな、と思いました。子どもたちを上手く引っ張っていつてくださって、「子どもだけでも表現できる」「子どもたちがつくり上げている」と思えたことは、すごく新鮮でしたし、感動しました。

事務局：K先生ありがとうございました。最後に、S先生お願いいたします。

外の世界と関わるきっかけづくり

～S先生とアーティスト・ワークショップ～



S先生 [都内公立小学校 特別支援学級担任]

特別支援学級にて5回、音楽と身体表現（新井英夫、セレノグラフィカなど）のワークショップに参加。

// 傷ついた子どもたちの心を解放したい

S先生：前任校の主任の先生が「これ面白そうだから応募しよう」と提案してくださり、応募したのが最初のきっかけでした。当時の学級には、通常学級で傷ついて、特別支援学級に来た子が多かったので、そういった子どもたちを解放させたい、自分たちのやりたいことをやる楽しさを味わわせたい、と思っていました。その時は、「子どもたちの固定観念を取り払いたい」と、はちやめちやな願いをし、音楽家の方に来ていただくことになりました。

「曲をつくろう」という活動の中で、最初は「お友達はいいな」という内容の曲をつくってくださったんですよ。ですが途中で、通常学級から来た6年生の女の子が「友達なんていいものではない」と。その意見を汲んでくださって、できた曲が『拝啓シンタロウ』です。「学校なんて大嫌い」というような内容でしたが、せっかくつくったんだから朝会で聴いてもらおうという話になりまして。学校中で歌って踊って…という体験ができ、通常学級の子たちにも、「特別支援学級って面白いな」と思ってもらえるようなきっかけができました。

// おおらかに構えてくださるアーティスト

S先生：2年目はセレノグラフィカさんが来てくださいました。先ほど、N先生が仰ったように、ボディイメージがつかめないうちが多くて、足首が固かったり、上手くしゃがめなかったり…。そのこともあって、基礎的な身体ほぐしも入れていただきながら、

心も身体もほぐすような経験をさせていただきました。その時も、朝会でダンス発表をしまして。「特別支援学級に面白い人が来ると、学校中で楽しめる」というイメージを、通常学級の子たちも持ってくれていたかなと思います。

どの回も、活動に入れない子や、気を引きたくていたずらをしてしまう子がいたんです。教員の立場だと、「いたずらしないで」と注意してしまうんですが、アーティストの方たちは、おおらかに構えてくださって。「この場にいたければいいし、嫌なら無理にいなくても良い」と言ってくださる姿勢から、教員として学ぶことも多かったです。

// みんなが参加したいと思える場づくり

S先生：新井英夫さんにも来ていただきました。同じ学級で一緒にいるのに、子ども同士の間合いが少なく状況だったので、「子どもたちが身体をほぐしながら互に関わり合える活動を」とリクエストしました。身体のいろんな部分を使って木の板を渡し合ったり、円になって、足踏みに合わせて板を叩いたり。普段は日直も難しいような子が、みんなの注目を集める足踏みの役を自ら買って出たり、誰もが参加できる・参加したいと思えるような場の空気をつくってくださいました。親でも、先生でもない人たちと関わり合いを持てる時間をつくってくれる、ということがありがたくて。それによって良い意味で、子どもたちは外の世界と関わりやすくなっているように感じています。

//先生とアーティストとの視点の違い

事務局：S先生ありがとうございます。

先生方のお話から共通で出てきたキーワードとして、「先生にはできないことをしてくれる」ということがあったかなと思うのですが、そのあたり、詳しく伺っても良いですか。

N先生：小学校でも、「身体表現に取り組みましょう」ということにはなっていますが、指導できる先生がいても、アートとは違うアプローチで行っているように感じます。アーティストと比べると、専門性が違うのはもちろん、教員としての指導をしなくなってしまうこともあります。

アーティスト・ワークショップを初めて実施した時、最初はアーティストの方との関わり方がわからなかったんですが、徐々に、「アートの部分はアーティストに任せて、教員はクラスマネジメントを行えば良いのだな」と思うようになりました。例えば、教員の役割としては、支えが必要な児童に心理的なアプローチで安心させたり、ダレ始めた時に注意するといったところです。でも本当に、アーティストの方はおおらかで、小さい動きでも「その子の表現だから良いんです」と認めてくださるので、子ども自身、普段やったことがないようなことにもチャレンジできているんじゃないかと思っています。

事務局：先ほどS先生の例にもあった「学校なんて大嫌い」の曲も、アーティストならではのアプローチなのかなと感じたのですが。



中西：アーティストの方は、ただ「学校なんて大嫌い」と言葉で言いたかったのではなく、「音楽に乗せることで伝えられることを大切にしたい」という気持ちもあったのかなと思います。「うたう」ことで、否定的な言葉も、また別の視点で感じられるというか。そして、先生方もその思いを受け入れてくださったからこそできた取り組みでした。

S先生：歌をつくる時に、アーティストの方がギターを片手に「俺も学生の頃はさ、学校なんてさ」と子ども相手に、同じ目線でお話をしてくれて。そこから曲がつくられていったんです。

K先生：子どもの心をあつという間につかみますよね、アーティストの方たちは。教員は、「子どもをここまで持っていきたい」「こうなると良い」と、評価を先につくりますけど、アーティストは、子どもを見てから判断して、良い評価をしてくれる。セレノグラフィカさんも、楠原竜也さんも、子どもを見たら、それぞれの子どもに合った動き、好きな動きや得意な動きが一瞬にしてわかってしまって、一人ひとりと動きを楽しんでくださっていることがすごいなと思いました。

//特別支援学級と通常学級での課題の違い

事務局：「特別支援学級の子どもたちだからこその活動の面白さ」を、私自身、ワークショップの現場で感じることもあるのですが、通常学級でも特別支援学級でも実施されているN先生は、両学級での活動の違いについて、どのように感じていらっしゃいますか。

N先生：持っている課題が違いますね。通常学級の子どもたちは、悪い意味で他の人の視線をすごく気にしていました。「こんなことを言ったら、やったら、周りの子はどう思うのだろう」と。私自身、担任の時は「自分が一番アホになる」ということをしてまして。よく子どもたちから「先生が一番子どもじ

やん」と言われていました。でも、オトナが率先して良い意味でタガが外れた姿を見せると、子どもたちも安心して殻を破って自分を出せるのではと思っています。アーティストの方も、それと同じような感覚なのかなと思います。新井英夫さんも、「変なオトナがいる」ということがわかると良いなと仰っていましたが、そういった部分を打ち破るのに、アーティストとのワークショップは有効だなと思います。特別支援学級にも、通常学級で傷ついて、二次障害を抱えているような児童もいまして。その子たちが「今のままで良いんだ」と、自己肯定感を高めるのにも良いなと思いますね。

特別支援学級の課題としては、ボディイメージやコミュニケーションの部分かなと。通常学級の子どももコミュニケーションの課題はあると思いますが、持っている課題はそれぞれ違うので、アーティスト・ワークショップはどちらにも対応できるのではないのでしょうか。

だからこそ、テーマ2の話にはなってしまいますが、通常学級と特別支援学級で一緒にワークショップをやってみると、いろいろなことが見えてきて、良いのかなと思います。ただ、それをどうやっていくかという部分は難しいのではないかと、両方の担任を経験した身として、実感しています。

//学校における「非言語的コミュニケーション」

堤：コミュニケーションについて、当団体でもよく、「アーティストとのワークショップを通して、コミュニケーション能力が普段と違う形で促進される」ということは言います。ただ、学校でのコミュニケーションは、主に言語的なものを指すかと思います。身体表現の中での「身体的コミュニケーション」は、アイコンタクトも身体の触れ合いも含め通じ合う、言葉で表しにくいコミュニケーションかと思うのですが、学校文化の中ではそういったコミュニケーションはコミュニケーションと言って良いのでしょうか。

N先生：今まで学校に足りなかった部分なのではと思います。例えば、音楽の授業が楽しめないという状況があるとしたら、「音楽の本質的な楽しさとか、音楽を介したコミュニケーションを味わう経験がないから」ということも考えられます。学校教育の中で重視されるコミュニケーションは、どうしても「言語的コミュニケーション」に重点があるように思います。アーティスト・ワークショップで経験したような、「舞台の上に立って、相手の動きを見て自分の動きを考え、相手との関係性を紡いでいく」ということは、言語ではないコミュニケーションですが、これからの人生で、きっとどこかで役立っていくと思います。



//「できる・できない」の枠を越えた活動

S先生：学校の音楽・体育・図工は、アートのまとまりだと思うのですが、例えば、「楽譜が読めない」「体育の技ができない」となると枠からはみ出てしまう。そういった枠組があるのは苦しいですね。アーティストの方とのワークショップは、その枠が緩い。

N先生：特に、特別支援学級は通常学級よりもその枠が緩いですね。一応枠はあるけれど、その子たちに合わせてやって良いことになっているので、自由度が高くていろいろなことが試せます。通常学級でもいろいろなことはできると思うんですが、なか

なかそこまでやりきれない。なので、アーティストの方との体験は、特別支援学級の子どもたちにとって、とても意味があるものなんです。

村山：粹っていうのは、教科書や、学習指導要領だったりするわけですね。

S先生：その粹があるために、授業の流れの中で、技術を求められることが多いので…。以前、音楽教育のカール・オルフの勉強をした時に、「楽譜なんて読めなくても音が楽しめる、それがヨーロッパの音楽教育の一つの考え方だ」ということを知って、そうだよなと感じたと同時に、日本の音楽の授業は「ここまでできなきゃ」というものが強いのかなと疑問に感じました。これは評価の問題なのですかね。

堤：すべてが技術的にではないのかもしれないけど、これが「できた・できない」というところが重視されちゃう、ということはあるでしょうか。一つの授業の中で、「今日はこれができるようになりました」というような…。

N先生：いろいろなアプローチ方法はあると思いますが、目標値みたいなものはあるので、時間がない中で「そこまで持っていくためには…」と逆算していきますね。特別支援学級は、例えば、「一年間かけてまっすぐな線をひきます」みたいな、それぞれに合わせた目標を立てられますが、通常学級になると、「この学年ではここまできちんと身につけさせてください」というのがあって、そのことが、音楽の授業をつまらなくしてしまっているところはあるのかもしれないですね。

K先生：「集団」という括りが、学校は強いんですね。個々がどう表現できたかというよりは、「集団」として一つができたか。「きれいな入場行進ができたか」「音ははずさないで合奏ができたか」。集団の括りの存在が日本ならではののかなと、今のお話を聞いて

いて思いました。

N先生：私もその葛藤を今抱えていて。特別支援学級では、子どもたちに合わせて自分も自由にやっていたのですが、通常学級で担任をしていると、自分が「社会にとってより良い人をつくる強制装置」のように感じてしまうことが時々ありまして。「集団の一員として」ということを指導するのですが、自分のその指導は果たして正しいのかと悩むことがあります。

//アーティスト・ワークショップの「評価」とは

中西：評価ということは、アーティストの方とも話題になることがあります。例えば先日、S先生の学校のワークショップで「大量の新聞紙を破いて身体に詰める」という活動をした後に、アーティストの方が「何かできるようになるといった活動じゃないけど大丈夫かな」と仰っていたことがありました。

N先生：全然大丈夫ですよ！（笑）

S先生：もちろんすぐの評価も求められるけれども、私たちは長い目で見たいんです。すぐに結果が出るものって、実際そんなに身につけてなかったりしますし、長い目で見て、心に何か残って欲しいと思っています。

堤：音楽とか体育、図工の「できる・できない」は結局、全員が揃うことに対する評価になるんですね。入場行進がキレイに揃うとか…。

N先生：いろいろな面は見ますが、それも一つの評価だと思います。もちろん、個々の子どもたちを見て、数値に出ないものを所見欄に書いてもいますが、どうしても「できる・できない」の評価はついてまわりますね。そして、音楽はやっぱ楽しくないという子どもたちもいて。そこには「楽器が吹けない」とか、技術的なハードルが原因だったりするんです。

板切れ一枚叩いて、音楽になっていって…というのが、私は音楽だと思っているので、そういう経験をきちんとさせてあげる場を、教員として用意してあげたいと思います。すべての学校で、アーティスト・ワークショップの場を、全学級が一年に一度持てたら良いなと思っています。

//アーティスト・ワークショップの「めあて」とは

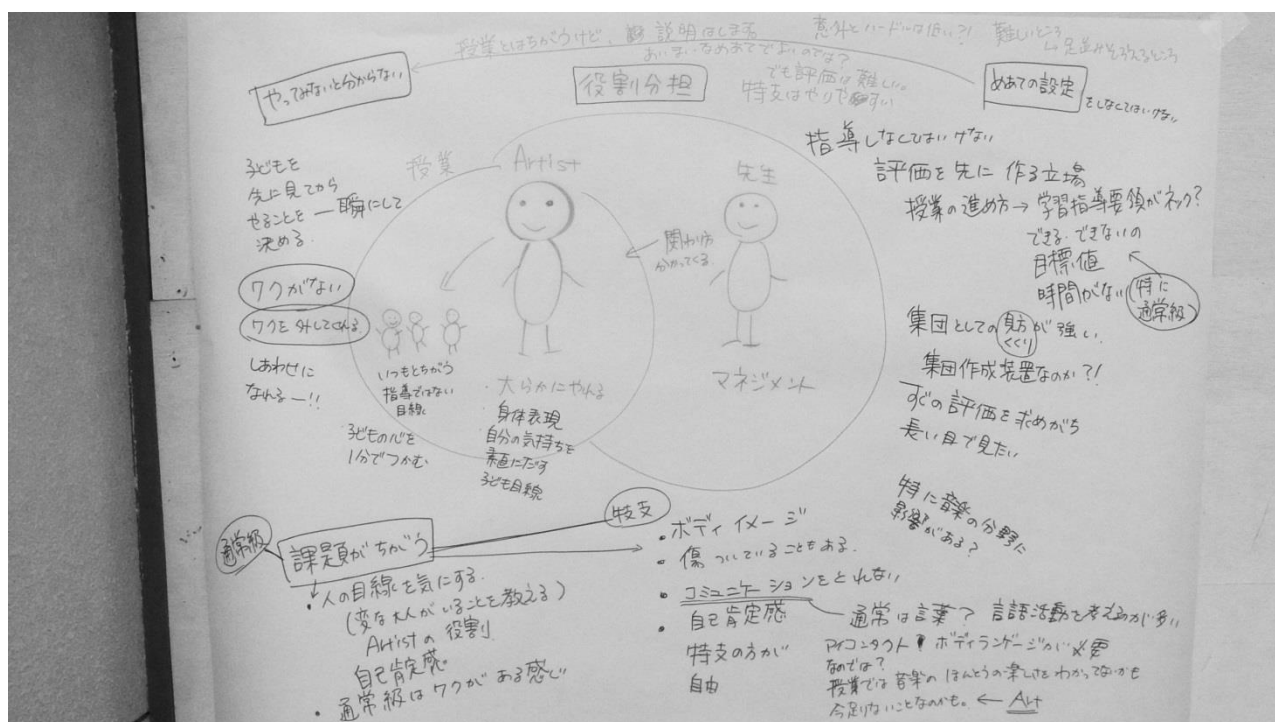
堤：先生は一つの授業にしる、単元にしる、「めあて」を立てて、まず「めあて」を設定してやることが多いのかなと思うのですが、アーティストの場合は違う。その時々子どもたちに出会って、特に身体表現や音楽系のアーティストは、わりと即興で、方向性を探りますよね。それは、たまに来るアーティストだからできるのかなとも思うのですが、先生方はどうお考えですか。「要は何をやるんですか?」と言われてしまいそうな、指導案がはっきりしていない活動だと思うんですが。

N先生：アーティスト・ワークショップをお願いする場合、必ず管理職に相談しなければならないので、いつも何か理屈はつけています。「外部との連携」というところで、「いいね」と言ってくださる管理職は多いと思います。私の時の理由としては、「学芸会で

つくる作品を、一緒に創作したい」「見たことないものを体験させてあげたい」「自己表現が苦手な子に経験させたい」などですかね。でも授業と違って、「ここまでが目標です」というところまでは提示しないです。その子なりに発見があれば良いなというくらいです。曖昧な「めあて」で良いんじゃないかと私は思いますけどね。最近、世の中も学校も数値とかが好きですからね。「子どもたちの目が輝いていました…」とかが許してもらえたら良いんですけどね。

K先生：私も管理職に「当たったのでやります!」と報告したら、「良かったね!」という感じで了解していただきました。「めあて」みたいなところは特に追求されず、「どんどん呼んで〜」という感じで言われましたね。特別支援学級だから呼びやすいというのもあるのではと思います。

N先生：通常学級だと、他の先生に遠慮してしまうところはありますね。特別支援学級でも、複数学級だったりすると、先生の間で温度差が出てきたりするかもしれません。テーマ2の交流アーティスト・ワークショップとなると、そこら辺が難しいところかもしれないですね。



テーマ 2

特別支援学級と通常学級の「交流」 としてのアーティスト・ ワークショップの可能性

事務局：テーマ1では、これまでの経験を元に、特別支援学級でのアーティスト・ワークショップの良さや、通常学級との課題の違いなどについてお話いただきましたが、次は、「特別支援学級と通常学級の“交流”としてのアーティスト・ワークショップの可能性」について、お話をしていきたいと思います。特別支援学級との活動の中に、通常学級の子どもたちが混ざると一体どんなことが起こるのか、その良さや懸念点などを出していただきたいと思います。

まずは、村山先生のお考えを伺えたらと思うのですが、いかがでしょうか。

// 先生同士の意識共有が重要

村山：「交流アーティスト・ワークショップって、楽しそうだけど、どうなるんだろう？」と、まだイメージが沸かない部分もあるのですが。先ほど、特別支援学級と通常学級の課題がそもそも違う、めあての置き方が違うという話が出ていたかと思うんですけど、一緒に活動するからにはやはり、「その時間にどういう意味を持たせるか」を、先生同士で共有することはとても大事なかなと思いました。

よく「交流及び共同学習」をする時に言われるのは、通常学級の先生が特別支援学級のことをどれだけ理解しているか、管理職がどれだけ意味をわかっているかというところで、今回も「アーティストを呼んで授業をしてもらう」というのを、どちらの学級の先生も、十分に理解した上で進め始めることが、大事なかなと思います。この辺りは、教育課程云々を考え始めると大変なのですが、イメージとしては、普段と違う人が来て、違うことをやるというのは、

良いことなのではと思います。

// 活動のハードルを低くする工夫

ワークショップではありませんが、少しだけ近いかと思う例を紹介します。小学校の4年生と特別支援学級の合同体育なのですが、普段の体育とは違う、「大きなウチワで扇いでもらって、みんなが紙のようにヒューッと飛んでいく」という活動をやっていたんですね。特別支援学級の子は身体も小さいし、動きもぎこちなかったけれど、この活動では運動能力の差は見えにくかった。個々の身体能力があまり問題にならない／その場ですぐ共有できるようわかりやすいルール／複雑な動きもなく自由にできる活動…今、交流アーティスト・ワークショップと言われて、パッと思い浮かんだのはこれだったんです。アーティストに「こういうことをやって欲しい」「こういうクラスでやって欲しい」と言った時、恐らく彼らはその場で、子どもたちの様子を見ながら、少しずつつくってくれるのかなと期待はあります。



ただ、課題も子どもたちの特性も違うので、そこをどう一緒にやるかというのを、これは先生たちがアーティストよりも気を遣うかなと。特別支援学級の最大20人弱くらいだから動けるけれども、それが、50人くらいになったらどうなんだろうというのが、逆の意味で興味はあります。もちろんそこで、一皮剥ける子もいるとは思いますが、やはり人数が多いことは子どもにとっては緊張も高いし、場合によっては、活動に対するハードルも高くなります。そのハードルを低くしてあげる工夫をしてあげる必要が出てくるのかなと思いますね。今の時点で考えていることは、このようなところですよ。

//交流ワークショップの「効果」と「懸念点」

事務局：それでは、皆さんのお話を伺っていきたいと思います。今からこちらの付箋をお配りするので、皆さんには、付箋にご意見をお書きいただけたらと思います。お書きいただく内容は、下記の通りです。

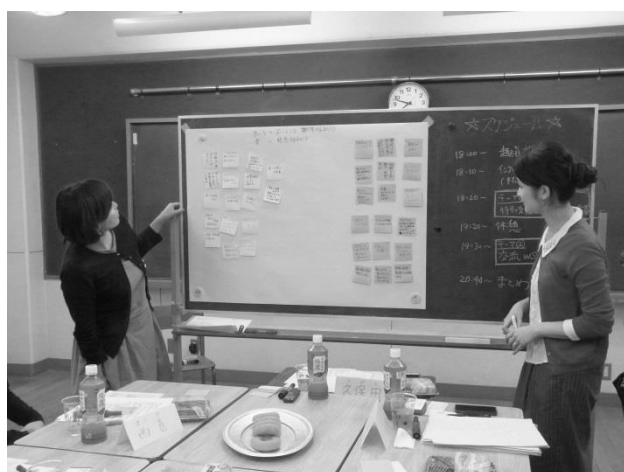
◆黄色付箋…「交流アーティスト・ワークショップ」
をすることで期待できる効果や良い
ところ。

◆青色付箋…「交流アーティスト・ワークショップ」
をするにあたっての懸念点や気をつ
けるべきところ。

今から 5 分ほどお時間差し上げますので、思いっ
くまにお書きください。書けた方は、前の模造紙
に貼ってってください。

～5 分経過～

事務局：すべての付箋が出揃いましたので、ここか
ら、この付箋に書いていただいたご意見をもとに、
お話を進めていけたらと思います。



◆付箋1—お互いを見る目が変わる

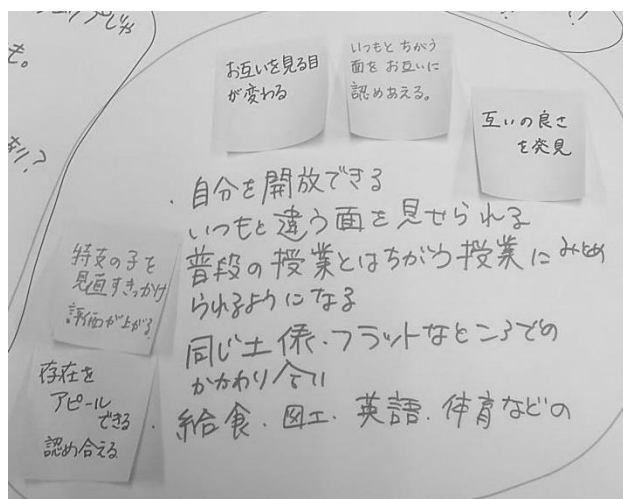
事務局：まず黄色の付箋から見ていきましょう。「互
いの良さを発見」や「お互いを見る目が変わる」な
どのご意見が多いですね。

S先生：私も「いつもと違う面をお互いに認め合え
る」と書きました。うちの学級の子たちは、普段あ
まり通常学級との交流がなくて、今つくっているこ
ろです。でも大きな集団の中に入ると、どうしても
不安で仕方がなくて、手の皮をずっと噛んでしま
ったり、自傷行為をして流血してしまったり…目立
つのは悪い面ばかりなんですよね。でも、もし一緒
にアーティスト・ワークショップができるなら、ワ
ークショップはいつもすごく良い顔で参加している
ので、普段見えていない部分を出せるのかなと。国
語や算数の交流よりも、特別支援学級の子たちの良
い面を見てもらえる気がします。

K先生：私は「存在をアピールできる・認め合える」
と書きました。普段は別々の教室で学習しているこ
とが多いので、同じ校舎の中にも、子どもたちは
自分のことでいっぱいなんです。それが一つの場
所に集まれば、「この学級も一緒のことしてるんだ
な」とか「運動会で逃げ回っていたAちゃん、良い
動きしてるじゃん」とか、そんな風に見てくれる通
常学級の子もいるんじゃないかなと。

N先生：たぶん「交流」というと、通常学級に特
別支援学級の子が入るパターンが圧倒的に多いんじ
ゃないかなと思うんですね。そうすると通常学級の
子と同じ目線での評価、例えば、「特別支援学級の子
も頑張ってるね」「自分たちと同じことを頑張ってや
ってるね」という評価になりがちなんです。でも恐
らく、アーティストの活動って、技術とは関係ない
じゃないですか。むしろ特別支援学級の子の方が自
分をどんどん出せて良かったりする。勝負ではない
けれども、同じ土俵でフラットなところでの関わり

合いが生まれる可能性はあるのかなと思います。



◆付箋2—活動は一緒にめあては別に

N先生：あと、「活動は一緒にめあては別」というのも書きました。例えば、特別支援学級の授業で「魚釣り」をやった時、ある子のめあては「魚の数を数えること」で、他の子のめあては「魚の数を計算すること」だったんです。通常学級と特別支援学級も、「一緒に活動しているけれどもめあては違う」という感じで、時間や教科の取り方をそれぞれで考えても良いかもしれない。通常学級は「道徳」で、他者への理解とかをめあてにするのもありかなと。やってる活動は同じだけど、それぞれのめあてを立てて、その中で新しいものを発見したりできるというところで、意味はあるのかなと思いました。

◆付箋3—短期で低学年からのスタート

N先生：あと、出ているご意見の中で、「短期が良いかも」というのは賛成ですね。さらに言えば、低学年のうちから短期でスタートして、徐々に長期にもっていく。ただそのためには、普段の交流の状態がかなり影響するだろうと思いますね。前任校に着任した頃は、交流の形がすごく良かったんです。通常学級の先生に、介助員も担任もつけずに、「子どもお願いしまーす」と言って、特別支援学級の子を送り

出す時期もありました。それが人が代わるとその良い状況が維持できないこともあります。

私、この交流アーティスト・ワークショップを、自分でやってみたいなと思いますけど、相手方の先生と相当関係ができてからじゃないとお願いできないかなと思っています。もし募集をかけて応募してくる先生たちというのは、そこをクリアして応募してくるんじゃないかなと。私だったら、絶対そこがクリアしてなかったら応募しない。これをきっかけに…というのは結構難しいかな。きっかけにするのであれば、やはり短期だと思います。できれば学年は低い方が良いかなと。高学年でいきなり、普段からあまり交流がないところで実施するのは…うーん。

◆付箋4—「交流」に対する両学級の先生の捉え方

堤：応募の段階で、通常学級と特別支援学級、両方の先生に窓口になってもらう必要がありそうですね。

N先生：「交流でもできます」というよりも、「交流でのワークショップをやってみませんか」のアプローチの方が引かかってくる人はいるかもしれない。「これをきっかけに交流できますよ」と言って、何も考えずに申し込んできた場合、結構大変なことが起こるかもしれないです。「交流ありきで枠は取ってあるのでどうですか」というアプローチの方が良いのかもしれないですね。いや、でも、そうすると申し込む人いないかな…。

村山：「交流及び共同学習」って、特別支援学級とか特別支援学校の先生は、わりと熱心な方が学校に必ず何人かいるけど、通常級の先生の方がどちらかというと保守的…と聞いたりしますがどうですかね。

N先生：私も今まで特別支援学級の担任をやっていて、いろんな立場の先生から言われて辟易したのは、「君みたいな若い先生は、早く特別支援学級を出て、通常学級で力を発揮しろ」という類いの言葉ですね。

その時はもう、「この人は、一体何を言っているんだろう。特別支援学級をなんだと思っているんだろう」と悲しい気持ちになりますけど、そういう感覚の人たちもいなくはないという現実もあって。やはり、「特別支援学級はおまけ」みたいな感覚を持っている人間が現場にいるのも事実だし、そういう話はたまに見たり聞いたりしますね。そういうこともあるので、なかなか通常学級の方から交流しましょうよという積極的なアプローチはあんまり起きないんじゃないかなと思います。

K先生：人によると思うんですけど、どの程度障害に対して理解があるとか、その先生自体、人生の中で障害のある方と接する機会があったとか、その先生の見目とか、考え方、経験にもよるのかなと思いますね。ベテランだから大丈夫というわけでもないし、若手だから駄目というわけでもない。あとは、通常学級でも、配慮が必要な子を抱えていると、その先生自身に余裕がない。さまざまな面で、受け入れ態勢ができていないかは重要なポイントだと思います。

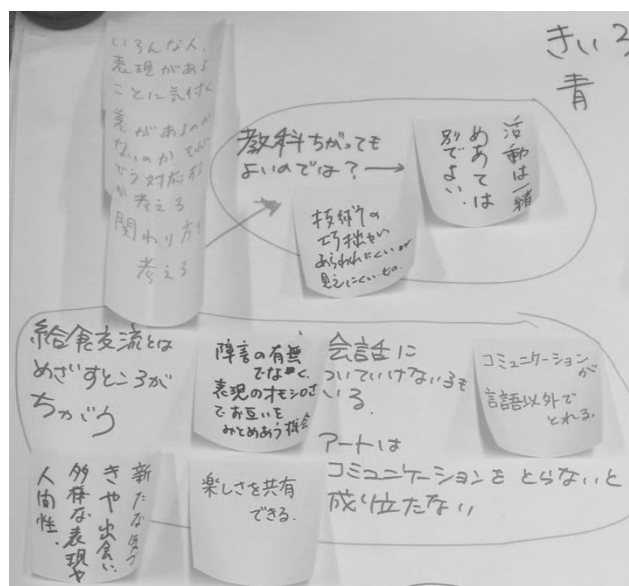
N先生：申し込んでくる人は、ある程度考えて申し込んでくるかなと思います。「交流学习の糸口にしてみませんか」と事務局側が言ってしまったら、「お任せすればやってくれるのかな」と思われてしまうかなと。

中西：交流がすごく盛んな地域の中学校の先生が話してくれたのですが…小学生の時に交流授業の中で「障害があるから仕方ない」と見られ続けたことで、中学生になった時に、頑張らない子ばかりになってしまったと仰っていました。一人ひとりがどこまで頑張れるかということを適切に見られなかったことが原因なのかなと。いろいろな難しい思いが、特別支援学級、通常学級の双方にあるのだなと感じました。

N先生：なかなか難しいなと思いますね。でも、一番交流が良かったと思う時期は、特別支援学級の子が給食に行ったり、授業に行ったりした時に、その子がパニックを起こしても、周りの子どもたちは全く動じなくて。「全然大丈夫だよー」と声をかけてくれたりしていたのは、すごく理想的な交流だったなと思います。

◆付箋5—言葉ではないコミュニケーション

事務局：テーマ1の時にも出ていた「非言語的コミュニケーション」について触れている方もいますね。



S先生：特別支援学級の子は、給食交流に行っても、通常学級の子の会話のスピードについていけないことがあるんですよ。オトナじゃないので、気遣いとかをせず、みんな好きに話してて。特別支援学級の子はホケーツとしたまま時間が過ぎるという。でも、アーティスト・ワークショップであれば、例えば手と手を合わせたまま動くとか、言葉が苦手な子も、言葉を使わずにコミュニケーションが取れるので、親しくなるきっかけになるのかなと思いました。

村山：アートの場合、言語以外でも何でも、コミュニケーションがないと活動自体が立ち上がってこな

いじゃないですか。でも、給食って、会話についていけなくても食べられるから、「トラブルにならないで終わったよね」で片付いてしまう。アーティスト・ワークショップをやりとしたら、そもそも、一緒に動かないと活動が成り立たず、その時間も成り立たないので、そういうところは、給食交流とは次元が違って、目指すものが違うのかなという気はしますね。

◆付箋6—何をもって「交流」と呼ぶか？

中西：例えば、特別支援学級のアーティスト・ワークショップで、最後に通常学級の子に向けて発表会をすることもあります。あれも「交流」と言えるのでしょうか。そうではなくて、何かペアワークをする時に、わざわざ障害のある子とない子を組み合わせることが「交流」になるのか。その辺りの感覚はどうでしょうか。



N先生：教科交流も、「行きました」、「静かにその場で過ごしました」、「交流しました」…と、形骸化されてしまっている場合もかなりありますね。交流のアリバイづくりみたいな。やるとするならば、やはり「同じ空間を共有する」というところでの交流なのではと思いますね。「なんとなく一緒に時間を過ごしましたよ」だけじゃなくて、「何か空間とか楽しさとかを共有しましたよ」というのがきちんとあるも

のを目指しますと言えた方が良い。こうしたことをきちんと共有できて、時間を取ってくれる先生方がどれくらいいらっしゃるのか…。

◆付箋7—先生向けアーティスト・ワークショップ

事務局：そうした先生同士のネットワークはないんでしょうかね。

N先生：実は、このアーティスト・ワークショップを継続的にやっている先生にお会いするのも今回初めてで（笑）。いつもアーティストの方を呼んでもらってるんですけど、もっと自分たちも授業の中でできるのではないかなとは思っています。私自身、時々外部のワークショップにも参加していて。子どもたちに散々「殻を破れ」というくせに自分は舞台に立ったこともないな…と思って、去年の夏はついに舞台に立ちました！オーケストラのダンサー募集だったんですけど…

S先生：私、その発表観ました！

N先生：私そこにいたんですよ（笑）。子どもたちが経験していることを体験できて、教員側ももう少し何か、自分たちでできることがあるのかなって、最近思ってるんです。そういうネットワークがあると良いのにと。新井英夫さんを講師にして、ボディワークのアクティビティみたいなのを身につけていくと、体育の授業とか、学級開きの時に使えるんじゃないかなと思ったりするんですけど、一人じゃ呼べないしな…と思ったり。昔お世話になったダンサーさんから、「踊りたい先生たちがいたら呼んでください」って言われたんですけど、そんな潜在的な教員はどこにいらっしゃると思って。是非、教員向けのアーティスト・ワークショップもやっていただけると輪が広がるんじゃないかと思ってます。

中西：アーティストは、先生だろうが子どもだろう

が、障害があろうがなかろうが、そこでは人を見ない存在なのだと思います。そういうアーティストの視点に触れて、「社会にはいろいろな人の関わりがあるんだ」ということを子どもたちが経験することで、社会に出た時に、障害があるとかないとかいうことにこだわり過ぎずに、「その人はその人」として関わっていけるようになると良いなと思います。

N先生：知らないんですよね。知らないから怖いとか、知らないから得体の知れないものになってしまうんだと思います。

◆付箋8—両学級の人数バランス

事務局：人数のバランスという点ではいかがでしょうか。大概、特別支援学級よりも通常学級の方が人数的には多くなるのかなと思うのですが、交流アーティスト・ワークショップをした場合、その人数のアンバランスはどのような影響があると思いますか。

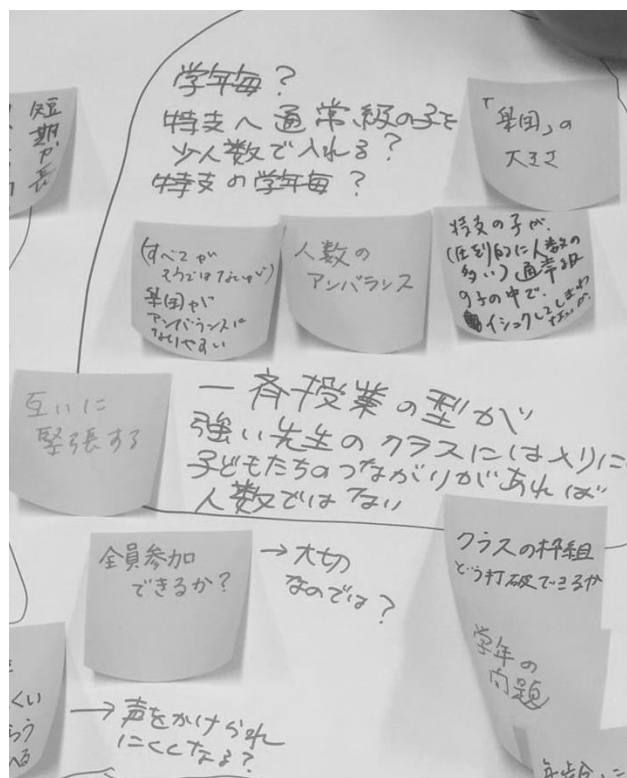
S先生：人数のバランスもあると思うのですが、先ほどN先生が仰っていたように、やはりそれ以前に、学級間の交流がどれだけできているかというところが大きいのではないかと思います。

以前、通常学級との交流に行き始めたことで、自傷行為が激しくなってしまった子がいたのですが、一年経って、その自傷行為が減ってきたんです。「どうしてA君は、自分を傷つけなくなったのかな？」と通常学級の子もたちに問いかけると、「僕たちと仲良くなれたからだよね」と返ってきてまして。子どもたち同士の繋がりができていれば、集団が大きかろうが、初めての場所であろうが、その繋がりを支えに、集団に入っていけるんです。だからやはり、交流ワークショップをしようとなった時、既に子ども同士との繋がりがつくり出されているかというのが大きいかなと。特別支援学級の子たちは、初めての場面はどうしても苦手だから、いきなり一緒に活動するとなると、やはりそれは難しいように感じます。

N先生：システム上の参加の枠組みがすごく組みづらいと思います。通常学級だったら、その一部だけ参加というのは難しいと思うので、通常学級全クラスを上げてになるかと。その時に、特別支援学級は、じゃあその学年だけ入れ込むのか、全学年丸ごと参加するのかなとか、そこら辺もすごく難しくなってくるのかなと思います。

堀：通常学級の4年生のクラスと、特別支援学級の1～6年生全員で活動するというのは、不可能ではないですか。

N先生：できないことはないと思います。あとは、通常学級をいくつかのグループに分けて、特別支援学級に複数のクラスがあれば、グループごとにクラスとの交流をさせるとか。それだったら、人数の問題も多少軽減されるかな…特別支援学級の人数にもよりますが。基本的には、同学年同士での交流というのが多いとは思いますが。



◆付箋9—普段からの「交流」の必要性

K先生：普段の下地があつての交流ワークショップなのかなと、お聞きして思いました。今、うちの学校では、給食交流をストップしているんですね。それがなぜかという、通常学級に行っても、特別支援学級の子たちはもう固まって、何も喋れなくなってしまうんです。食も進まず、これって給食交流の意味があるんだろうか？となってしまうて。

給食交流をしていた時は、特別支援学級の子を通常学級に連れて行くのと同時に、同じ人数の通常学級の子たちが特別支援学級に来て、一緒に給食を食べて、様子を知って帰ってもらうというのがありましたね。そうした交流の時って、通常学級の担任の先生も配慮して、特別支援学級の子を笑ったり、傷つけるような反応をしない子を送りこんでくれるんです。そこで、「あ、特別支援学級ってこんな風に給食を食べてるんだ」とか、「こんな子がいて、こういう風に先生とやりとりしてるんだ」という感想を持って帰ってくれる。そういうところで普段の下地があると、今回の交流アーティスト・ワークショップもやりやすいのかなと思いました。

事務局：普段交流がない子たちをいきなりポンと集めて、さらによくわからない人が来て、「楽しいことしましょう」と言っても、やはりかなりハードルが高いということですかね。

K先生：低学年なら可能性はあるかなと思います。

村山：下地がないところで高学年だと、「何を今更…」という反応もあり得るかなと。「アーティストが来るからやる、そのために集まりますよ」となってしまうと、本当に文字通りイベントになってしまう懸念がありますよね。こちらが思ってるほど、前向きにならない子たちも含まれると考えると、普段から交流に感覚的に慣れていることは大事なかなと思います。

◆付箋10—特別支援学級にとってのメリットは？

堤：今回の交流アーティスト・ワークショップについて、通常学級の子どもたちにとっては、何か得るものはあるかなとイメージできるんですが、特別支援学級の子が例えば、特別支援学級の子どもたちだけでワークショップを受ける以上の、もしくは、それとはまた違うメリットがあるのかなというのが、あまりイメージできていないのですが、いかがでしょうか。

N先生：今回狙ってるのは、特別支援学級の子が通常学級にお邪魔するのではなくて、同じ土俵でフラットに活動していくんですよね。そういう経験をして、「あ、特別支援学級の子どもたちも自分たちと同じようなところがある」とか「こんな違いがあるんだ」とか、いろいろ感じる子もいるんじゃないかと思えますね。身体表現でも良いし、図工的なことでも良いし、音楽でも良いし。技術だけじゃないことで何か結果が出せたり、表現できる活動だから、とても意味がある気がします。

K先生：特別支援学級にいと、そこがいつもの世界で、いつもの環境になっているんですが、通常学級との交流は、ある意味「社会に出て行く」という感じになると思うんです。いつもいつも助けてもらってる自分じゃなくて、大きくなっていずれ社会に出て行く時も、「こういう風に見てもらえた」という経験が自信になっていく。いろんな子がいるとは思いますが、いつもの世界から飛び出すというのは特別支援学級にとっても新鮮で、嬉しいことなのではないかと思います。

事務局：まだまだお話を伺っていたいのですが、そろそろ時間がきてしまいました。最後に、村山先生から、本日の考察をいただきたいと思います。

// 村山先生からのコメント

村山：ここまでお話を伺っていて思ったのは、アーティストと呼ぶにしても、呼ばないにしても、これは「交流及び共同学習」の全般的な課題だなという話がたくさん出てきたと思うんですね。交流先の学級の間関係がどうなってるかとか、担任の先生同士の間関係ができてるかとか。今回、このような交流アーティスト・ワークショップをやってみたいですか？と問われた時に、先生方は恐らく、具体的な学年やクラスを頭に浮かべたと思うんです。こうした交流をしようとした時に、実際「その年のその子たちがどういう子たちか」というところにかかなりかかってくる気がします。もちろん、アーティストが来てくれることは、何かきっかけになるかもしれないし、今まで思い浮かばなかった何かが生まれる可能性はありますが。それほど、通常学級と特別支援学級が交流する時には難しさも大事さもあって、そこが、今日のサブタイトルになっている「インクルーシブな活動」というところにかかってくるのかなと思います。

インクルージョン実験校というのが海外にはあるんですけども、本当にすべての子たちを寄せ集めているわけではなく、「障害のある子たちも入れますよ」というぐらいで、その年に入ってきた子たちによって、どういう学校をつくるかも変わってくる。それぞれの学校で、「今年はこういうメンバーでやっていきます」という時に初めて、じゃあどういう活動ができるかという話になるんだろうなと思います。

あとは、本人や親御さんの意識が高いかどうかポイントになってくるのかなと思います。親がこうした活動に関心があったり、その子自身が特別支援学級の子たちと実際どれほど関係がつかれるかによって、交流アーティスト・ワークショップのやりやすさなども変わってくるのかなと、改めて感じました。

事務局：ありがとうございました。それでは最後に、先生方お一人ずつから本日の感想をいただいてもよろしいでしょうか。

// 先生からのコメント

S先生：「芸術家と子どもたち」の活動を通して、先生同士がこうして繋がれる場は今までなかったので、すごく心強く感じました。「やっぱりこの活動良いよね！」と、他の先生方と共有できたのが嬉しかったです。ありがとうございました。

K先生：今回こんなチャンスをいただけて、本当に新鮮な気持ちになりました。私は特別支援学級の先生としてスタートしたのが小さな島だったこともあり、障害のある子とない子が一緒にいるという環境が当たり前で。「交流及び共同学習」の感覚というのがわからない部分もあったのですが、今日いろいろなお話を伺えて良かったです。ありがとうございました。

N先生：アーティスト・ワークショップを経験している先生とお話する機会はこれまでなかったので、とても楽しい時間でした。やはりアーティストが学校に来て活動するという時間は、子どもにとっても担任にとっても、とても良い時間です。またこれをずっとお願いしたいと思います。私自身、今は通常学級の担任ですが、また特別支援学級に戻りたいと思っているので、その時は是非この取り組みに参加したいです。今日はありがとうございました。

事務局：皆さん、本日は本当にありがとうございました。今後の活動の指針となる貴重なお話ばかりで、あっという間の3時間でした。また、今後多々ご相談させていただくこともあるかと思うのですが、引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

座談会 2

アーティストの会

～アートで繋がる子どもたち～

【実施日】 2016 年 2 月 16 日（火）

【参加者】 新井 英夫 [体奏家・ダンスアーティスト]
楠原 竜也 [振付家・ダンサー]
隅地 茉歩 [振付家・ダンサー／ダンスカンパニーセレノグラフィカ代表]
阿比留 修一 [ダンサー／ダンスカンパニーセレノグラフィカ所属]
村山 拓 [東京学芸大学総合教育科学系特別支援科学講座講師]
堤 康彦 [特定非営利活動法人芸術家と子どもたち 代表]
中西 麻友 [特定非営利活動法人芸術家と子どもたち 事務局スタッフ]

【進行】 久保田 菜々子 [特定非営利活動法人芸術家と子どもたち 事務局スタッフ]

【記録】 竹丸 草子 [特定非営利活動法人芸術家と子どもたち 事務局スタッフ]

テーマ 1

特別支援学級における アーティスト・ワークショップの 意義について

事務局スタッフ（以下、事務局）：先週の〈先生の会〉に引き続き、今回は〈アーティストの会〉ということで、皆さんにはお集まりいただきました。〈先生の会〉と同じテーマで、アーティストの皆さんの視点からお話いただけたらと思います。

まずは、特別支援学級におけるアーティスト・ワークショップについて、お一人ずつこれまでの経験から感じられていることをお聞きしたいです。通常学級で実施する時との違いなども含めて、その意義や面白さなどをお話いただければと思います。

// まずは、興味を持てもらう

新井：通常学級だと、とりあえず先生が授業始めますという、その日の当番の子が出てきて、「始めます」なんて言って始まるんですけど、特別支援学級は、なかなかそうはいかないですね。興味を持ってくれば、かなり面白いものが出てくるんですが、興味を持ってくれないとやらない。「授業だからやらなきゃいけない」というのがなかなか通用しにくいのが特別支援学級で、そう意味では、「本質的に子どもたちが面白いものって何かな？」というのが、こちらが問われる現場だと思います。

だけど、特別支援学級と通常学級でワークショップのプログラムを僕が大幅に変えているかっていうと、実はそんなにやってることは変わらないんですよ。変わってるのが一つあるとすれば、ワークショップの進め方かな。プログラムがステップアップしていく1・2・3の間を、通常学級でやるよりも、特別支援学級ではより細かく刻んでみるとか。そもそも興味を持てもらうための仕掛けみたいなものを、特別支援学級の方が、たくさん入れていく

ことをしてるかなって気がします。

// 障害のある・なしとは何か

新井：「踊るってなんだろう」「踊る時に音って必要なのかな」「踊るってことは、身体がいっぱい動いているから踊るということなのかな」みたいな、「人間が表現することの根本は何か」ということを、より特別支援学級では学ばせてもらえるというか、問われるというか。

あと、ワークショップが終わった後に感じることは、「障害のある・なし」ということ自体が一体何なのか」と、その線引きについても考えますね。そもそも何でこの子たちは特別支援学級にいるのか、出てきた表現のユニークさでいうと、どっちが良い悪いは、通常学級と比べてなかなか言いがたいものがある。もちろん学習的な支援とか、いろんな生活の支援というところでは、特別支援学級の意味はあるし、別々に活動すべきところはあると思うけど、「障害のある・なし」って本当は、ある便宜的な見方に沿って線引きした仮の区分け以上のものではないと実感しますね。



僕はここ3年くらい継続して、横浜市旭区にある成人の障害者の方の地域作業所「カプカプ」で、隔月でワークショップをさせてもらっていますが、学校での特別支援学級と通常学級の区分けがそのままオトナの社会に持ち込まれているなあと感じる場面に直面することがあります。「カプカプ」は、そういう先入観を揺さぶろうと、地域の開かれたユニークな活動をしている作業所です。障害のある方にとって安心で安全な場所を担保する必要はあると思うけど

れど、高くて強固な壁をつくって隔離するのではなくて、子どもの頃から自然と交わった方が良いんじゃないかなということも思います。

//「本質的に楽しませるもの」

事務局：特別支援学級のワークショップでは、「本質的なものが問われる」ということですが、新井さんの経験の中で感じた、「子どもたちを本質的に楽しませるもの」って例えばどんなものでしょうか。

新井：直感的に相手と何かをする…それはひよっとすると、同じ振付を踊ること、もしくは違う振付なんだけれども、同じ場を踊るということで共有する…ってことでも良いんですけど、「他者と何かをする喜び」とか、「自分自身の表現や振る舞いが、周りの人に認められる」ということじゃないでしょうか。特にダンスはそういうことがあるんじゃないかなと思います。非言語の人間が持っている本質的なコミュニケーション。言葉で全部を覆いつくせないことですかね。

例えばピアノの演奏とか、自分で表現するまでに習熟が必要なこともあるんだけど、僕のダンスのワークショップは、「何かを習ったからできる」というよりも、「今ここの身体にある、本人でも言葉にならないような原初的なエネルギーをどうダンスとして導き出すか」ということが中心になります。だから、個々の内面が上手い下手じゃなくダンスとして表出できて、互いに交感できて、直感的に言葉を介さずにありのままの存在が認め合える場ができた時には、子どももオトナも関係なく、本質的な喜びになるんじゃないかなと思っています。

事務局：ありがとうございます。続いて、阿比留さんいかがでしょうか。

//ゆったりと進行していく

阿比留：新井さんのお話にすごく共通していることも多かったです。通常学級も基本的に同じですが、

特別支援学級では、一人ひとりの子どもと付き合う感じがいつもあって。すごく時間をかけてその子を知っていくみたいなイメージを持っています。

ワークに気を遣うというところでは、速度ですね。ゆったりな感じをいつもイメージしていて、その方が浸透するのも早い気がしています。その速度の違いは一つの大きな違いなんですけど、浸透する度合いは、通常学級でも特別支援学級でも、上手くいけば同じくらいの成果が出ると思ってます。だからいつも課題なのは、自分たちがどれくらいのスピードや言葉がけで彼らと付き合うことができると良いかを、いかに測るか。その都度修正しながらやってるのかなーと思います。



// 漬物石になっていた子が踊る時

阿比留：複数回あるワークショップだと、僕たちも初めて会った時より変化が見える時もあるし、先生の方でも変化が見られるのではと。もっと欲を言うと、それが2年、3年、5年と続いていくと、自分たちも年を重ねながら、お互いに何か変わっていくんじゃないかなとすごく感じています。

一つ事例を話しても良いですか。大阪の方で、7年くらいお付き合いさせてもらった活動があったんですが、ほとんど毎年リピーターが多くて。その参加者に、漬物石みたいに座ったままの男の子がいたんです。結構ショックで、最初はどうしたら良いかと悩みました。だけど、その活動が3年、4年と続く中で、ある日その子がスクッと立って踊り始めたんです。ワー——！と思いましたし、それは長期スパンで取り組めたからこそなのかなと感じました。

あとは、その子が「参加している」ということを僕たちがどれだけ感じ取れるかということですよ。その場で何もしていないようでも、活動からはずれているように見えても、その場にいるというだけで共有してくれている。その雰囲気や、その子のアピールとしてきちんと捉えること。それを続けているといつか、彼が何か興味を持った時に、活動に入ってきて踊り出す。嫌な子は嫌だと出て行くので。でも、出て行ったら子も中に入って来て、踊らなくても、踊る音楽を流してくれたりして。だから必ずしも、ダンスのワークショップをしているからといって、ダンスを踊らなければいけないというのではなく、何かその世界で彼が役割を持てるような場づくりができたかと考えています。何かその子が発見してくれるような、自分にとってやりがいのあることみたいなものを見つけてもらえたら。何か見つけた時の食いつき度はすごいですね。

// 役割を持ってもらう

事務局：活動からはずれてしまう子がいた時、また戻ってくるような仕掛けみたいなものは、いつも考えているんですか。

阿比留：そうですね、たまたまの時もありますけど。例えば、すごく機械が好きで、記録カメラとか、CDラジカセとかをいじってばかりの子がいて、最初はそれを止めてもらおうという方向に持っていったんですけど、それが難しくて。どうしようと悩んだんですが、ある時、その子に音楽係を任せたら、夢中になってやり始めたんです。この子は、CDをかけることになったら、熱中できるんだと。その後はもう舞台監督のような役割になって。役割を持たせるというのは、何か彼らを成長させていくんではないかなと感じました。

事務局：ありがとうございます。では、楠原さんいかがでしょうか。

// 「感覚」の鋭さに働きかける

楠原：新井さんが仰っていた「本質的」というところだと、特別支援学級の子どもたちは、「本能」とか「感覚」の部分に特に反応するなと思っていて、幼児とか乳児に近いものがあるのかなと感じます。今1歳半の息子がいるんですけど、何か会話をするというより、身体の感覚的な部分はコミュニケーションを取り始めてるところがあつて。特別支援学級の子どもたちも、音や身体接触など、五感の部分が敏感で鋭い気がします。

あと、特別支援学級では、より丁寧に繰り返すというのも意識しています。彼らからリクエストがあつたり、興味があるワークはもう1回繰り返す。時間のかけ方や言葉の投げ方も変わってくる部分はありますね。通常学級以上に、敏感なくらい、今全体がどうなっているかを意識しています。



// 先生と一緒に場をつくる

あとワークショップ中、先生たちの関わり方で、子ども様子もかなり変わってきます。例えば子どもたちのことを少しオーバーなくらいに褒めることで、彼らの動きが活き活きとしたりする。その声かけがあるのとないのでは、その場の雰囲気も大きく違ってきます。

先生方の普段のご指導もあるし、それをいきなり僕たちがバーンと現れて壊すのも良くないと思うんですが、良い意味でそこを壊さずに、メスを入れていくというのは必要かなと。良い感じでその学級に僕らの色を混ぜていけたらと。それができなかったところもあれば、こちらが何かしなくとも自然と

混ざっていたとこともあります。いろんな現場を経験しましたが、まだまだ発見はありますね。

事務局：ありがとうございます。最後に、隅地さんをお願いします。

//居心地の良い時間をつくる

隅地：もう皆さんがたくさん仰ったので、共通のことがすごく多かったんですけれども。私たちも、通常学級と特別支援学級で、ワークショップのプログラムを大きく変えたりはないんですね。待つ時間がたっぷりだったり、伝え方や言葉の選び方、言葉を使わない方が良いかなどは留意はするけれども、「特別支援学級の子たちだからこれは無理だろう」という勝手なジャッジはしないように心がけてたりはしますね。私たちのワークショップが、参加してくれる子どもたちにとって、居心地の良い時間とか、安心できる場所みたいな場になれば、私はすごく嬉しいです。でもそう思って、回数を重ねて一緒に時間を過ごしていくうちに、彼らといるということが、私たち自身にとって居心地が良かったり、安心できるということに繋がっていたりすることがあるなと感じますね。



//なるべく場をマネジメントしない

特別支援学級の子もたちと一緒に授業をやると、人間の繊細さみたいなものに気付くというか。みんなそれぞれで、一緒ということはないんですけど、例えばどこかがものすごく澄みきっていて。何かに対してとても微細にチューニングされている身体だ

ったり、ものすごく透明な心の状態だったりに出会えるのは、私たちにとって宝物ですね。なるべく場をマネジメントしない関わり方…「私が地図を持っていますので、こういう風に進んでいきましょうね」ということではない関わり方…ができれば良いなと、ようやく思うようになったんです。

阿比留がさっき漬物石の子の話をしていましたが、彼に一番最初に出会った時、動いてくれないということがすごく気になって動揺してしまっ。もうこの場を何とかしなくちゃいけないというような、右往左往を勝手にするんですよね。座っている漬物石のところに行って、手を引っ張って立たせようと、ある意味乱暴なことをしてしまったり。でも、「あ、そうじゃなくても良いんだな」と思って静かにしていると、その子の方から立って来て、手を引っ張ってくれて、踊らせてくれる、そんな幸せなことが起きたりしたこともありました。踊らせてもらった時とか、彼の美しい身体をに出くわすと、「彼らより私たちがの方が果たして踊れているんですか？」と問い直させてもらえます。

あと、ご担当の先生については、これまでは経験上恵まれていて、そんなに大問題なことはないんですけれど…（笑）大変だろうなという時に手を貸してくださったり、クールダウンのために、子どもをちょっと外に出してくださったり、私たちができないことに手を貸してくださったりしてますね。

//ワークショップ中の先生の関わり方

新井：先生もやってみないとわからないというのはあると思います。例えば、初めてアーティスト・ワークショップを実施する学校で、先生も一生懸命サポートしてくださる姿勢はあるんですけども、どうしたら良いかわからなくて。「一緒にやってください」というと、「一緒にやって良いんですか？」みたいなところから始まったりもします。まずは回数を重ねることで、どういう間合いで入ったら良いかを体感してもらいます。そこから「決して僕が言った指示が通らなくても良いですから」とお伝えしつつ、

ワークショップ後には率直な意見感想もいただいた上で、先生と協働で場をつくりたいというスタンスでいます。

事務局：アーティストの方から見て、「先生方には、ワークショップ中はこうして欲しい」というような基本スタンスみたいなことはありますか。

新井：何か子どもができない時に、先生という立場だと、「できるようにしなきゃいけない」があるから、本当にさっきの隅地さんじゃないけど、動かない子の手を引っ張ったりしてしまう。でも、動きたくなかったら動かなくて良いからというのを、私たちは先生にお願いすることが必要ですかね。あと、先生からフィードバックをもらうために、先生に輪の中に入ってもらうことも大事です。ただ、「半分は子どもと一緒に踊って、時折半分は観客になってください」とお願いして、先生にも客観的に見てもらう時間を、特に特別支援学級では通常学級より多く設けるようにしています。

// 未分類な表現を見せてくれる子どもたち

事務局：先ほど、隅地さんの話にもあったように、私自身も、とても繊細で美しいダンスに出会う機会が、特別支援学級の子との活動の中では特に多いなと感じているのですが、こうしたアート活動で輝く、障害のある子が持つ力って、どういうところにあるのかなと。

楠原：アートは枠が広いというか、正解が多いというか。うーん、正解とは言いたくないんだけども…。

隅地：障害のある子は、私たちが想定している望ましい状態みたいなのを軽やかに飛び越えますよね。それを正解と簡単に言いたくない気持ちもとってもわかります。

新井：こちらが整備する棚にどこにも入らない、未分類なものに出会っちゃう。

楠原：UFOみたいな。

新井：そりゃあわくわくしますよね。

阿比留：思わず見惚れてしまうんです、僕。彼らが動く姿に知らんうちに、見惚れちゃう。そういう時って、「うわーなんかこれを見るために俺たち一緒にやってきたよね」みたいな、そんな風にその子のことを思ってみたり。それを本番で出して欲しいと思っちゃうけれども、それはまあね（笑）。逆に本番まで全然踊らなかった子が、ずーっと見せてくれなかったことを本番でやったりもするんですよ。なんだ、やっぱりやるつもりだったんだみたいな。隠してたんだなって。その時に最高のものをやるために、ずっと誰にも見せなかったのかなって。練習でも同じように本気出さなきゃいけないと思わないのが彼らの特性の一つでもあるかなと思いますね。

中西：子どもはずっと輝いてるんだと思います。でもそれが、いわゆる学校の中だと消えてしまうのかもしれない。よく先生が、「子どものあんな顔みたことない」と仰ってくださるけど、そんなことはないのかなと。毎日の生活でも良い顔を見せているはずですよ。もちろんアーティストと出会って、彼らのキラキラした部分が引き出されてることもあるのだろうと思うんですが、「別にそこにいるだけで良い」ということが、アーティストと出会うことでより強調されていくということなのかなとも思います。

// 「感じ取る力」の強さ

堤：特別支援学級でのアーティスト・ワークショップを見ていて思うことの一つは、感覚と表現の結びつきについてですね。アーティストの皆さんも、感覚の鋭さからプロの表現者としてやっていっているのだと思います。もしかしたら、誰もが持ってるの

かもしれないけれど、特別支援学級の子どもたちには、独特なそれぞれの感覚があって、インプットの感覚が鋭い。それをアウトプットするかは、隅地さんの言葉を使わせてもらえば、チューニングのようなものが合った時に出るんですが、まずは、感じ取る力が強いのかなと。音だったり視覚だったり触覚だったり。匂いで感じていて、反応してる子もいるのかもしれない。五感以外の感覚も含めて、やはり感覚の鋭さが彼らの表現に与えている影響は大きいのかなと思います。

隅地：雑駁な情報にそんなに左右されてないというようにあるかなと思うんですね。自分が照準を合わせたいところに、わりと常に集中している状態だから、「今ってこれが望まれている場ですね」ということはあまりなくて、その分、その場の状態にはまった時にスパーンといくっていう気がします。まさにチューニングですよ。でもそれが合い続けてるっていうこともなくて、揺れもあって、何らかの生理的要因で急にシャッターが降りたりとか。自分のそういう揺れに対してもすごく素直だなあという気がします。

堤：通常学級だと、周りの目を気にしちゃって動けなくなってしまうという状態ってあるじゃないですか。高学年なんて特に。あの状態だと、やっぱり感じ取る力は弱まっちゃってるんじゃないかなと思うんですね。

隅地：自意識に邪魔されてしまってますよね。

堤：ある意味、周りの目はすごく感じ取ってるんだけど、表現に繋がるようなものは感じ取れない。

// 自分の感覚に正直な子どもたち

新井：だから何か、すごく空気を読み過ぎるとか、同調圧力が強くなっちゃうと、類型が多くなっちゃいますよね。誰かやったことを結構上手くパクった

りとか、テレビで見たイメージからなかなか抜け出られなかったりとか。もともとそうしたものが比較的少ない特別支援学級の場合、いわゆるチューニングが合った時のジャンプ力のようなものは、すごいなと思います。

通常学級にも、普段の授業では目立たないと言われていたような子が、我々の活動の中でふとした瞬間にハイジャンプを見せてくれたりすることもあるんですが。揃えたりとか、あるところに向かっていくということが不得意でも、それぞれが自分の歩き方を見つけるとか、寝転がり方を見つけるみたいなことには長けてる人たちなのかもとは、いつも思いますね。自分の感覚にはすごく正直。我々アーティストもつい、子どもだからこれくらいだろうと先入観に囚われたり、作品をつくる時に、同じことを繰り返してしまう自己模倣に陥るんだけど、彼らを見て「いやー、かなわない。表現の原点・ナマなものを見ちゃったな」という時はありますね。

阿比留：ワークショップが終わった後に感想とか聞くじゃないですか。またそれが、「詩人が君は」っていうことを言うんですよ。踊った後に「春風が吹いたよ」とかね。どこからそんな言葉出てきたんだっていうようなことを。自分の感覚にはまった時に、彼らから出てくる言葉っていうのも、すごいですよね。とても落ち着いて自分の踊ったダンスを振り返っていて、通常学級の子が頑張っているいろいろ調べて感想を書いてくるよりも、いとも簡単にスッとすごいことを言っちゃうみたい。え、そんな言葉知ってたのみたいなことも何度もありますよね。



テーマ 2

特別支援学級と通常学級の「交流」 としてのアーティスト・ ワークショップの可能性

事務局：続いて、＜先生の会＞で作成したシートをきっかけにしながら、テーマ 2 についてお話ししていきたいと思います。まずは、交流アーティスト・ワークショップに関して、「何が期待できるか」「どんな良いことが起こるか」など、プラスの面についてご意見伺えますか。

// お互いの存在を認め合うきっかけづくり

楠原：お互いに存在を認め合うとか、存在を知るとか…そういった部分で、ワークショップが担えることはあるかなと思いますね。

隅地：そうですね。普段一緒に過ごしてる人とは違う人と、場を共有する。それはすごく大きなことだと思うんですよね。今年、福島県いわき市の復興支援プロジェクトで、普通科高校の演劇部の子どもたちと、その高校に併設されている特別支援学校の高等部の子どもたちとで、舞台作品を一緒につくったんです。20 分くらいの舞台作品をつくるワークショップが 8 回あったんですけど…。

阿比留：月 1, 2 回くらいのペースで、放課後に集まりまして。3 回目くらいからかな。普通科高校の子と特別支援学校の子が挨拶し出すんですよ。生徒同士で。話し出すんですよね。もちろん歳も一緒だし、男の子と女の子が出会うと照れてるし。特に普通科の子たちが気を遣ってるというわけではなく、むしろ特別支援学校の子どもの名前を呼びながら、積極的に関わってました。先生たちもこんな風になるとは思わなかったって仰ってましたね。

隅地：作品づくりですから、全員で同じような振りをするという場面もあるんですけど、普通科の子と特別支援学校の子で別のケアをしようとは特にしませんでした。「一緒にやるという前提で、めいめいの関わり方で進んでいいんだな、それを見守ってみよう」と。作品に関わっている全員が、どうなっていくかわからないけれども、「どうなるかな」というところに、みんなでただ耳を澄ませていくことで、「こうしなきゃ」という変な力がかからなかったところがありましたね。



// 誰がいても良い「居場所」づくり

新井：最近実は、自分の活動について、「ワークショップ」という言い方をし過ぎないようにしているんです。「ワークショップをしよう」って思っちゃうとはりきっちゃうんですよ。「何かやらなきゃいけない」「踊らせなきゃいけない」みたいなプレッシャーとかね。なので、最近ふと「居場所」という言い方をしてみてるんです。誰がいても良い「居場所」。

そこにいと例えば、「先生」っていうのはとりあえず置いておける、「生徒」っていうのも置いておける。それぞれがいつも担っている何かを置いておいて、ポコッと来れるような「居場所」になった時、特に通常学級と特別支援学級が一緒にやるワークショップって意味があるんじゃないかと。すごく平らかに言ってしまうと、「あ、同じ人間なんだ」ということを感じる場所。障害があるから良いとか悪いとか、通常だから良いとか悪いとかなくて、「ああ、障

害持ってても、付き合いやすい人もいれば苦手なやつもいるな」とか。サポートをしたらかされるとかいうのを一旦置いて、とりあえず「ダンスみたいなことをやるらしいよ」ってくらいにゆる〜く集って（笑）。そういう新たな場所をつくるのが大事なのではと思いますよね。

社会全体で、子どもの頃にこういうことをやっておくと、障害のある・なしの隙間とか、枠を飛び越えるような下地づくりができるんじゃないかなって。僕自身、こういう仕事に出会ってその枠を越えられるようになったという経験も踏まえてなんですけど。

事務局：その「居場所」づくりの中で、アーティストが担える役割とは、具体的にどういったものになるのでしょうか。

// みんなにとっての「なんじゃこりゃ」に会う

隅地：通念として設けられているかもしれない、障害のある・なしで隔てられている部分というのが、何ら意味がない、ちっぽけなことだっていうことを、その場にいる人みんなで実感できるようなことがつくれたらというところかなと思います。何か手伝ってあげなきゃとか、させてあげなきゃとか、お手本見せてあげなきゃみたいなことを、通常学級にいる子が、必ずしも、特別支援学級の子に対してする必要はないんだということを、子ども自身が気が付くと良いなと。そのことのためにというのもおかしいけれど、それができると良いなと思いますね。

通常学級の中だけでも、人間が集団になっていれば、誰が成績が良くて、誰がビジュアルが良くて、誰がモテていて…みたいなパワーバランスがありますよね。それを壊して、クラスの景色を変えろということのために、私たちは普段ワークショップをしているようなものじゃないですか。だから、それが良い形で交流ワークショップの時にも行われたら良いんじゃないかなと。特別支援学級の子どもたちばかりに配慮するわけでもなく、「何が素敵な」って、みんながニュートラルに見られる下地ができればと

思います。

新井：「障害のある A さん」じゃなく、いかに「A さん」と見られるか。年齢や障害の有無や立場とかも越えて、いかに個として出会えるか、ですよね。それはオトナもすごく難しくて、通常学級でも難しくて。だけど、我々アーティストがいると、普段とは価値観や見方がガラッと変わったり、評価軸がぐらぐら揺さぶられたり、「誰もこれで測られたことない」みたいなものさしが出てきちゃったり…。そういう時ってみんなにとって「なんじゃこりゃ」の出来事だから、「できる・できない」とか、「経験がある・ない」とか、関係なくなってくるんですよね。そういう場があるっていうのはある意味面白いかなって。「アーティスト」って、お医者さんみたいに権威があるわけでもないし、ある意味、仮初の姿じゃないですか。「なんじゃこりゃ」っていう存在の我々がやるから許されるところがありますよね。



隅地：最初にけったいなことをする人っていうか。「あ、そういうので良いんだ」って思ってもらえる役っていうのを担ってるかもしれませんね。

// どんな学級環境をつくっておくか

楠原：あと、交流ワークショップをやるにあたって重要になってくるのは「環境」じゃないですかね。子どもの人数とかワークショップの回数、年齢とかは、すごくいろいろ考えないと思います。永遠にアーティストがその子たちと関わり続けて、責任持てたら良いけど、なかなかそうはいかないですしね。

新井：そもそも、前回＜先生の会＞にいらっしゃった先生方は、我々のアーティスト・ワークショップを経験されていて、それなりに良い体験をされている方々なので、肯定的に見てもらってると思うけれど…平均的に、学校の先生に「交流アーティスト・ワークショップをしましょう！」と言ったら、どれくらい乗り気になるのか疑問ですね。そもそも「インクルーシブ教育をやりましょう」という流れが、一般的にどれくらい先生方の中にあるのでしょうか。

村山：先生によって温度差はかなりありますね。やろうという人の方が少ないんじゃないかと感じます。

新井：実は、通常学級と特別支援学級が混じってワークショップをするという経験がこれまで何回かありまして。それは僕がオーダーしたからとか、先生と事前の相談があったからとかではなく、気付いたら混じってたという感じで。その学校自体、校長先生の方針があつてなのか、普段から学級間の交流をかなりやってたんですよね。で、僕は通常学級の子どもたちとワークショップをしに学校にいたんですけど、フリースペースみたいなところで準備してる間に、近くに教室があつた特別支援学級の子どもたちと仲良くなっちゃって。たまたまワークショップの時間、彼らも時間が空いてるから、じゃあ一緒にやっちゃおうかということになりまして（笑）。僕は最初大丈夫かな？と心配もあつたんですけど、通常学級の子が、「ああ、K君また来てんのー？」って特別支援学級の子に声をかけてるのを見て、ああ、この学校は普段から関わりがあるから大丈夫なんだなと思いました。

一方で、全く違う状況になった経験もありまして。通常学級が全学年単学級で、特別支援学級は3、4名しかないという学校だったんですけど、ここは小さい学校だから、普段から交流があるもんとばかり思ったら、それが全くないんですよ。通常学級とのワークショップに向かう体育館までの道のりに、必ず特別支援学級の教室前を通らなきゃいけなくて。

ワークショップ用の赤い服を着た私が通るもんだから、特別支援学級の子どもたちも気になって仕方ないじゃないですか（笑）。挨拶して、「良かったらワークショップにおいで」って誘ったんですよ。でも、普段から交流がないもんだから、先生方もどういう風にしたら良いかわからないし、子どもたちもお互いにギクシャクしちゃって。結局数分しか一緒に活動できなかったんですよ。あれはすごく厳しい状況だったなって思います。だから、いざ交流アーティスト・ワークショップをやる時、すごく時間をかけて取り組めたら良いなと思うんだけど、普段からの関わりとか、そもそもの学校側の状況って結構大事ななって。

//お互いが繋がる手がかりをつくる

事務局：「数分しか活動できなかった」というのは、子どもたちがお互いに嫌がっていたんですか。

新井：嫌だっていうか、固まっちゃいましたね。今までやったことない場に行くわけですから。でも、3日間のプログラムの間でだんだん滞在時間が長くなったりしてたんで、もうちょっと続けられたら、いろんなことが起きてくるんだろうなって気はするんですよ。

村山：先ほど「居場所」って言葉が何回か出ましたけど、その状況はどう考えても子どもたちにとっては居心地悪いですよ。子ども同士を混ぜて関係をつくるためには、何か媒体が必要で。ただ同じ部屋にいて黙っていれば関係がつかれるというわけではないので、子ども同士だけでなく、先生方同士も、何か繋がる手がかりが必要なのだと思います。その共通媒体がここではアートの中身なのかなと。仮に数分しかその場にいられなかったってことは、その子にとって、そこには繋がる手がかりがなかった。ただ同じ空気吸ってるってだけで、活動に参加してるとは、本人は自覚できない。そうすると、普段の教室の方が居心地良くなっていきますよね。



阿比留：繋がるという意味では、僕は、子どもとのファーストアタックで、とにかくコンタクトを取るというのを心がけますね。「君と僕、どこかで会ったことあるよね？」ぐらいの勢いで話しかけると、グッと入って来れる子もいます。わりとおとなしい子の場合は、もう少し違う形で声をかけるタイミングを伺ってみたりとか。特別支援学級の子で、ワークショップの流れをつくる取っ掛かりになるような子がいると、そこからアプローチして、みんなの居場所をつくっていくっていうことも少しずつしていく感じです。

村山：さっき新井さんが仰った、活動が数分しか続かなかった学校の場合は、やっぱりアーティスト側がどうっていうだけじゃなくて、そもそも先生同士が繋がれてなかったんじゃないかと思うんですよね。

新井：それは、先ほどは遠慮して言わなかったけれど強く感じてました（笑）。ワークショップの時間とかもきちんと告知されていなくて。最初から全員で活動に参加してくれていたら、こちらも少しずつ段階を踏んで上手く2つの学級をシャッフルできたかなと思うんですけど、結構活動が盛り上がってる時に、特別支援学級の子たちが先生に連れられてトボトボ体育館来たりしたんですよ。「ちょっと待っててねー」って言いながら、「このタイミングで来ないでー」と思ったりして。そういうこともあって、上

手く繋げなかったんですよ。

隅地：特別支援学級の先生でも、通常学級との交流を強くは望んでいない方も中にはいらっしゃいますよね。

村山：そうですね。「なぜ交流しなきゃいけないの？」「なぜ通常学級に放り込まなきゃいけないの？」と思っている先生方も結構いらっしゃいますね。

//「発表会」としての交流について

中西：特別支援学級のワークショップで、時々、最終日に通常学級の子どもたちに向けて発表会をすることがあって、それも一つの交流の形かなと思います。でも、特別支援学級の先生自身が、通常学級に時間を割いてもらったことに気を遣っていて、それは彼らのパフォーマンスを、低い評価でしか見ていないからかなと感じたケースもありました。

新井：障害のある方たちって、特にどのタイミングで本気のスイッチが入るか、喻えるならどこで刀を抜くかわからないことってあるじゃないですか。ここで？という時に抜いたり、抜いて欲しい発表会本番には抜かなかったり。通常学級の子どもたちに発表会をする時、「頑張ってる障害者」みたいなパリンピック的な見方で、「通常学級の人たちも頑張ってるね」っていうことに落ち着く交流だったら、ちょっと我々が関わる意味とはずれてくるかもって思うんです。だから必ずしも「発表会が素晴らしかった」という出口を求めるんじゃなくて、先生方には是非、その前のワークショップの段階から、何が起こるかわからない船と一緒に乗って、付き合っ欲しいなと思います。「良い発表、良い公演ができたね」ばかりを気にして欲しくはないなと。

隅地：私たちも以前に、特別支援学級の子どもたちとパフォーマンス作品をつくって、最後に通常学級の子どもたちに向けて発表したことがありました。

その時、観客側の先生の立ち姿が印象的で。どことなく腕組み、仁王立ちのような様子で。でも、見てくれた通常学級の子どもたちは、特別支援学級の子たちの発表をすごく喜んで見てたんですよ。終わった後に感想を聞いてみたら、「きれいだった」とか、「面白い!」「カッコ良かった!」など手を挙げて発表してくれて。そうやって自分のクラスの子たちが感想を言っている、その先生の表情や身体への感じは、さほど和らいでいない印象でした。あくまでも印象ですが。

新井：事前に先生とも一緒に踊る機会があった方が良さそうですね。

事務局：交流アーティスト・ワークショップをしようとなった時、子ども同士はあまり問題ではなくて、先生同士の交流の方が、重要なポイントになってくるのかもしれないね。

// 先生同士の交流ワークショップの必要性

堤：もし交流ワークショップをした場合、先生の数には特別支援学級の方が多いじゃないですか。そのバランスというのは、どんな影響があるんですかね。

村山：先生が多ければ上手くいくとは限らないと思います。特別支援学級の先生が全員来たら、絶対役割分担するかなと。記録係、Aちゃんにつく係…とか。先生が特定の子につくと、子ども同士の繋がりが切れるじゃないですか。先生が全部手取り足取りしてあげちゃうから、子ども同士の繋がりが切れちゃうっていう話を、介助員の方ともよくお話するんです。だから、特別支援学級の先生がたくさんいるから良いというものでもないかなと思います。

堤：例えば、ワークショップをする前に、通常学級の担任の先生と、特別支援学級の担任の先生と一緒に、少しワークショップをするっていうのはどうなんですかね。

新井：それすごく良いと思います。

楠原：事前にやれると良いですね。打合せと合わせてミニワークショップ的なことを。以前、特別支援学級の先生だけでしたが、やったことがあるんですよ。ダンスは特に、言葉だけじゃ伝わらない部分も多かったんですけど、一緒に動く中で、感覚的に理解してもらえました。



新井：僕も前、初回のワークショップで怖い顔して見てた教頭先生がいたんだけど、一緒に動いてもらったら、とても楽しんでくれて。その後毎回来て参加してくれました。「実は、俺、こういうの好きだったんだ」って（笑）。

村山：普段の授業とかでも、交流したいとなった時、特別支援学級の先生たちって、どの先生にその話を持ちかけるか絶対考えるんですよ。案外子ども同士よりも、先生同士の方がバリアを張っているのかもしれないですね。

// 交流を低学年からスタートする

事務局：先生同士の関わりが大きなキーポイントだというのは、＜先生の会＞の時と同じ流れになりましたね。その他、交流アーティスト・ワークショップをするにあたって、考え得る懸念事項って何かありますか。

楠原：やはり、低学年から始められたら良いかなと思います。高学年でいきなりやるとなると、既に障害のある方に対しての偏見を持っていたりすることもあると思うので、そうした偏見を持つ前に、関わりを持つきっかけにできたらなって。もちろん、そうやって既に偏見を持っているような子が、交流ワークショップの中でバーンと大きな発見があって、その後の関わり方が変わるみたいなこともあるかもしれないですけどね。

事務局：高学年の子は「何となくその場をやり過ごす」という方向に行ってしまうと、純粋な意味での交流みたいなのは生まれにくいんじゃないかなという話は、＜先生の会＞でも出ていましたね。

堤：障害のある子に対して、偏見なり、何か差別的な見方をしてしまっている高学年がいた時でも、通常学級の子と特別支援学級の子が同じ人数なら何とかなると思うんですよ。でも、そこに人数の差が出てしまうと、そういった偏見もなかなか解消できないかなと。

//いろいろなアート活動を組み合わせる

新井：先日伺った小学校で、作品展をやっていて見て回ったんですよ。通常学級も特別支援学級も同じ会場に作品が並んでいて。ちょっと轟然目もあるかなと思うんですけど、同じテーマでも、特別支援学級の子の作品の方が圧倒的におかしいっていうか、ユニークなものが並んでるんです。通常学級の方に行くと、「あ、ちょっとこいつパクッたな」とか「キラキラのせるの流行ったのかな」みたいな、類似性や統一性が見えて。その分、特別支援学級の子の作品は一つひとつが際立って見えなんです。例えば、ダンスのワークショップでも、踊る前にいくつか仕掛けをつくって、造形とか、音楽みたいなものと連携するのも、また違った一面が見られる一つの手かなと思うんですよ。

隅地：それ良いですね。私も先日、踊った後に絵を描くっていう現場に立ち会ったんですけど。子どもたちが丸くなって絵を描いてたんですね。それで、たぶん特別支援学級じゃないかな？っていう子の絵がとても爆発的で。美術教室に行つて、「私は絵が上手」と思ってる子が、それを見てすごく焦ってたりして、それもちよっと微笑ましかったですね。その時は、先生は特に評価とかはしないんですけども、ダンスだけでなく、何か別のジャンルのアートと組み合わせるのは面白いなと思いましたね。



新井：それぞれのジャンルの得手不得手がありますしね。たくさんの人と触れ合うダンスは嫌だけど、素材を介して、何かをつくることはずっとやられているみたいな人がいたり。そういういくつかのプログラムを合わせるっていうのは良いかもしれないですね。写真とか、シャッターを押すだけで、何かできるみたいなのも良いかも。

隅地：「何もしていないのもあり」ということが、どこかで担保されてて欲しいなっていうところでしょうかね。

//「対話の場」をつくることを目指して

事務局：そろそろ時間も迫ってきたのですが、最後に、そもそも何をもって「交流」と呼ぶかということも含めて、この交流アーティスト・ワークショップは何を目指して実施すべきかということについて、ご意見いただけますでしょうか。

中西：そもそも「何かを目指さなくて良い」という感覚が、学校だと共有しにくいということが、最近気になってます。

隅地：「これをしたことで、こんなことができるようになりました」を、さあ挙げていきましょう！っていうようなことじゃなくて良いような気がするんですけどね。フィードバックの持ち方って、実はかなりデリケートなものなんじゃないかなと思うんです。成果を列挙しましょうということとは何か違うような。ある人が言った一言で、その場のあり方が一方向に引っ張られてしまうことがあると思うので。

新井：言い方は良くないかもしれませんが、二枚舌作戦が必要かなと思う時もあります。学校の先生には「こういう効果目的があるかも」と仮に伝えるには伝える。でも実際ワークショップでは、効果目的に縛られ過ぎない、というか一直線に行けないことの方が多い。むしろ寄り道、裏道、散歩道を積極的に歩いて行く。そうでもしないと、ワークショップ自体が学校側に受け容れてもらえない場合もあるのではと思ったりします。

事務局：＜先生の会＞に来てくださった先生方も、やはり学校では指導しなくちゃいけない立場で、評価しなくちゃいけない立場で。まず「ねらい」があって、そこから授業を組み立てるというのは基本だと仰っていましたからね。

楠原：まずは交流アーティスト・ワークショップをやってみて、そこから考えるっていうのは駄目なんですかね。先生も僕らも考える。「これって、どういうことなんだろう？」「どうしていききたいんだろう？」って。

新井：例えば、交流アーティスト・ワークショップをやることによっていろんな問題が出てきて、そして立場を越えて話さなきゃいけないじゃないです

か。だからもう「対話の場をつくるためのきっかけの授業です」という言い方をしちゃうとか。学校がお客さんで、アーティストが合わせていくのでもない。かといって、アーティストが突然上から来てやりたいことをやるでもない。通常学級と特別支援学級も含めて「対話していきましょう」ということを軸に、活動していく。ここから話そうよって、ここから始まるんだって。



中西：時々、ワークショップ後の振り返りの時に、泣かれる先生もいらっしゃるんです。アーティストの皆さんと出会って、こういう子どもの関わり方があって、自分は今までこういう関わり方をしていたけれど、違ってたかもしれないということを、涙ながらにお話される先生を見ていると、オトナのためのアーティスト・ワークショップみたいなのもあると、何かが動くのではないかと思います。1年、2年じゃ何も変わらないかもしれないのですが。

隅地：立場は違うけれども、お互いの気付いたことをまずは交換してみませんかってところから始めたいですね。対話って言葉も出てきましたけど、2者が3者になっても、それが4者になっても、気付いたことをただただ交換しようという意識を持つことで、学校の中でこうした活動をする時の、風通しは良くなるのかなと思います。

事務局：あっという間にお時間がきてしまったので、最後に村山先生から、ここまでの話を伺ったの考察をいただきたいと思います。

//村山先生からのコメント

村山：ここまで、何回も私が頭を抱えているシーンを見られてますけど（笑）、いかに学校って、「able」にがんじがらめになってるのかなって。何ができるようになったとか、成果を形にしなきゃいけないプレッシャーってものすごく強いんだなって改めて思いました。

遊びと似ていて、アートってどこか目的を持たないじゃないですか。お話を伺いながら、「そもそも目標が必要か？」ってメモしたんですけど、「こういうことのためにやりますよ」っていう目標があれば、その方が管理職は説得しやすいですけど、そうでないところにもっと可能性があるというのは感じました。



変な言い方ですけど、学校にとって異分子みたいなアーティストが来ることで、学校がどう変わるのか。ワークショップを受けた子どもたちにどんな経験があり得るのかなというのを考えさせられました。極端な話、障害の有無が問題なのではないかなとも思いますし…。学校って、「既に知識を持ってる子・そうでない子」や、「〇〇ができる子・できない子」とか、そういう尺度で測ることがどうしても強いですが、そこにいきなりアーティストがやってきて、何か「誰も知らないこと」を始める時に、その「持っている・持っていない」や「できる・できない」が一回チャラになってスタートできるっていうことが、この活動の可能性かなと感じました。

事務局：ありがとうございます。今日の座談会はこれで終わりですが、今後も皆さんとはワークショップの現場でお会いできますし、この座談会をきっかけにして、また対話を続けていけたらと考えています。そして、翌年度以降、何か実際に「交流アーティスト・ワークショップ」の実施に向けて動き出す際には、是非お力をいただけますと幸いです。本日はありがとうございました。

アーティスト・プロフィール

あらい ひでお
新井 英夫 [体奏家・ダンスアーティスト]

幼少より落語に親しみ、のち演劇を始める。1987～96 年まで身体表現グループ「電気曲馬団」を主宰、住宅街での大道芸ダンス・再開発地域での十五夜野外劇・都内廃校小学校体育館でのダンス公演等を「投げ銭形式」で実施。まち・人・風景と交わるパフォーマンスをこの頃から継続中。89～98 年まで野口体操を創始者野口三千三氏から学ぶ。その「力を抜いたからだ観」から深い影響を受ける。97 年より国内外でのダンス活動を独学で開始、音楽家・美術家との国際共同創作も多数。公演活動との両輪として、障害のある方や乳幼児から高齢者の方まで幅広い対象に向けたダンスワークショップ「ほぐす・つながる・つくる」を教育や福祉やコミュニティづくりに関わる日本各地の現場で展開している。現在まで山形大学・天理医療大学・国立音楽大学にて非常勤講師。

<http://blog.goo.ne.jp/karakara>

くすはら たつや
楠原 竜也 [振付家・ダンサー]

玉川大学文学部芸術学科演劇専攻卒業。在学中にロンドン・ラバンセンターに留学。2002 年「APE」を結成・主宰。『多くの方に HAPPY を届ける』をテーマに、国籍・年齢・性別を問わず、多くの人々に楽しんでもらえる作品を創作、国内外にて公演を行う。2005 年よりテレサ・ルドヴィコ（イタリア）演出『雪の女王』、『にんぎょひめ』、『旅とあいつとお姫さま』に出演し、俳優としても活動する。近年、幼児から一般の方へのワークショップや、学校等へのアウトリーチも積極的に取り組み、表現活動と教育活動を同時に実現することを目指している。法政大学、女子美術大学、玉川大学、国立音楽大学非常勤講師。2008 年、文化庁新進芸術家海外留学研修員として半年間イタリアにて研修。財団法人地域創造「公共ホール現代ダンス活性化支援事業」登録アーティスト。

セレノグラフィカ [ダンスカンパニー]

関西を拠点に国内外、屋内外を問わず幅広く活動を展開する結成 19 年のダンスカンパニー。多様な解釈を誘発する不思議で愉快的な作風と、緻密な身体操作が持ち味。隅地菜歩（TOYOTA CHOREOGRAPHY AWARD 2005 「次代を担う振付家賞」[グランプリ] 受賞）は「踊るぬいぐるみ」、阿比留修一（平成 8 年度大阪府芸術劇場奨励新人認定）は「かかとの無い男」とあだ名され、ヨーロッパ、韓国、オーストラリアなど国外でも作品を発表。近年は公演、ワークショップを含め全国各地へ遠征し、また 250 を超える教育機関へのアウトリーチを行うなど、「身体と心に届くダンス」を生み出す日々である。（一財）地域創造「公共ホール現代ダンス活性化支援事業」登録アーティスト。幼稚園や小学校などでは「まほさん、あびちゃん」として人気。

<http://www.selenographica.net>

◇ 座談会をふりかえって ◇

「特別支援学級の子どもたちと、通常学級の子どもたちが、一緒にアーティスト・ワークショップの場を集ったら、自然に交わりながら、楽しい交流の時間を過ごせるのでは？」そんな漠然とした理想を思い描いて、実施した2つの座談会だったのですが、現状の「交流及び共同学習」の難しさや、一過性のイベントにしない工夫など、今後の取り組みに向けて、たくさんの課題をいただける時間となりました。

「言語的コミュニケーション」に偏り過ぎず、「できる・できない」の評価軸を用いないアーティスト・ワークショップでは、学校内の既存の「交流」では実現しにくい、「両学級の子どもたちの、よりフラットな関係性での関わり合い」を実現できる一つの可能性があることを、今回感じることができました。しかし、子どもたちが「ただその場をやり過ごす」時間にならないよう、学年や人数の配慮はもちろん、普段の学校生活の中での関係づくりが、重要なポイントとなります。子どもたちにとって、本当に意味のある「交流」に近づけるためには、その年のそれぞれの学級に集まった子どもたちと向き合いながら、じっくりと時間をかけて、時には身体表現や造形、音楽など、さまざまな活動を組み合わせて取り組む必要があることを、実感する座談会となりました。

そして、興味深かったのは、どちらの会においても、「学級間の先生同士の繋がり」というのが、こうした交流の取り組みを行う際の、重要な課題として挙げられていたことです。子どもたち同士の「交流」の時間をいかに充実させるかとあれこれ考えていても、その前段階となる、先生同士の「交流」の課題が大きく立ちはだかってくる。この問題からは、先生に限らず、私たちオトナこそまず、さまざまな人とフラットな関係性を築いていくことに意識を持つべきなのではと感じさせられました。そして、だからこそ、「アーティスト」という「なんじゃこりゃ」の存在との出会いが、子どももオトナも、既存の価値観から離れ、新しい関係性を築いていくきっかけになるのではと考えます。

また今回、個別のワークショップの場では顔を合わせる機会がほとんどなかった、先生同士、アーティスト同士の横の繋がりをつくり、改めてアーティスト・ワークショップの意義について確認し合えたことも、私たちの今後の活動の大きな原動力となりました。今回の座談会をきっかけに、引き続き、活動に関わる方々との対話を大切にしながら、アーティスト・ワークショップの新たな可能性を探っていきたいと考えています。

久保田 菜々子

[芸術家と子どもたち 事務局スタッフ 本誌編集担当]

特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち

アーティスト・ワークショップに関するこれまでの刊行物

- エイジラス活動記録集2002年度版
- エイジラス活動記録集2003年度版
- エイジラス活動記録集2004-2006
- 特別支援学級でのアーティストによるワークショップ型授業
 - ー 実践例とそこから見てきたこと 活動報告書 （2008年度発行）
- ASIAS2009 事例報告書①特別支援学級でのアーティストによるワークショップ型授業
「素材と場を感じながら造形する」
- ASIAS2009 事例報告書②特別支援学級でのアーティストによるワークショップ型授業
「即興演奏からつくられたオリジナル曲を演奏する」
- パフォーマンスキッズ・トーキョー フォーラムvol.2 の報告・記録冊子 （2012年度発行）
「創造性とコミュニケーション ～創造性はどこから来るのか？自閉・発達障害傾向の子供の特性から考える～」
- パフォーマンスキッズ・トーキョー フォーラムvol.3 の報告・記録冊子 （2013年度発行）
「社会性とは何か？コミュニケーションと身体感覚 ～アーティストによる子供ワークショップの実践を通じて～」

※ パフォーマンスキッズ・トーキョー関連の書籍は、当団体のホームページより閲覧可能です。

報告・記録

特別支援学級ワークショップについての座談会

～インクルーシブ教育の理念に基づいた活動に向けて～

発行・編集 特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち

発行日 2016年3月30日

特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち
東京都豊島区西巣鴨4-9-1にしすがも創造舎（旧朝日中学校）
TEL. 03-5961-5737 FAX.03-5961-5738
E-mail. mail@children-art.net
<http://www.children-art.net/>

本事業は、損保ジャパン 日本興亜ちきゅう倶楽部
2015年度「Heart&Arts プログラム」の助成を受けて、実施されました。